

2025 年度

授 業 計 画
(シラバス等)

大阪行岡医療大学

シラバスの利用方法

このシラバスは、受講する科目について、あらかじめ、担当教員が授業に関する情報を提供しておき、学習の効果を高めるために作られたものです。「授業科目概要」、「授業の目的」、「授業計画」、「教科書」、「参考文献」、「成績評価」の順番に授業に関する必要事項が明示されています。この一冊で受講科目の内容がすべてわかるようになっていますので、よく読んで有効に活用してください。

1. 受講科目を登録する前に

選択科目を登録する時に、科目名だけで判断するのではなく、「科目目標」及び「授業内容」をよく読んで、自分の学ぼうとしている科目がどのようなものであるかを確かめてください。

2. 受講の前に

「授業計画」には授業開始から終了までの計画が示されていますので、授業全体の進度や展開の流れを知るうえで、参考になります。授業を受けようとする時、前もってその「授業計画」を知っておくと、学習効果がいっそう高まります。予習の内容や方法、準備しておくべきもの、留意事項等についてあらかじめ知っておくことが大切です。受講の前には必ず読んでおいてください。

3. 受講中に

シラバスは担当者が前もって作成するものですから、学習の状況によっては、授業の内容や進度などが修正されることもありますので注意してください。

4. 受講の後に

受講後に授業内容を復習する時、ノートの整理をする時などにもう一度読み返してみることも必要です。また、授業を欠席した場合にも、その時の授業が何についてであったかを把握できます。

5. 卒業後に

卒業後、就職や進学をする時の提出書類に、在学中に履修した科目内容について記載を求められることがありますので大切に保存しておいてください。

目次(カリキュラム表)

科目区分		掲載ページ	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態				学年別 単位数							
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習		1 前	1 後	2 前	2 後	3 前	3 後	4 前	4 後
教養教育科目	心と身体 の理解	6	心理学	1前	2			○			必修科目 20 単位 選択科目 6 単位以上選択	2							
		7	健康スポーツ科学	1前		1			○			1							
		8	心の健康と運動	1後	1			○					1						
	コミュニ ケー ションと情 報の理 解	9	教育学	2前	2			○						2					
		10	臨床教育学	2後	2			○							2				
		11	人間関係学	1後	2			○					2						
		12	英語コミュニケーションⅠ	1前	1				○			1							
		13	英語コミュニケーションⅡ	1後		1			○				1						
		14	医学英語	2後	1				○						1				
		15	キャリアセミナー	1通	1				○										
		16	統計学	1前		2		○				2							
		17	情報処理演習	1前	1				○			1							
		18	脳と心	1後		2		○					2						
	科学 の理 解 と社 会環 境	19	法学	1後		2		○					2						
		20	社会福祉学	1前	2			○				2							
		21	栄養学	1前	2			○				2							
		22	生化学	1前		2		○				2							
		23	公衆衛生学	2後	2			○							2				
		24	生命倫理	2後	1			○							1				
			小計（19 科目）	—	20	10	0	—											
専門基礎科目	人体の 構造と 機能	25	運動器系解剖学	1前	2			○			必修科目 41 単位 選択科目 2 単位以上選択	2							
		26	内臓系解剖学	1後	2			○					2						
		27	神経系解剖学	2前	2			○						2					
		28	運動器系生理学	1後	2			○					2						
		29	内臓系生理学	2前	2			○						2					
		30	解剖学実習	1後	1					○			1						
		31	生理学実習	2後	1					○					1				
		32	運動学	1後	2			○					2						
	疾病と障 害の成 り立ち 及び回 復過程 の促 進	33	病理学	2後	2			○							2				
		34	臨床心理学	2後	2			○						2					
		35	内科学	2後	2			○							2				
		36	整形外科学	2後	2			○							2				
		37	神経内科学	3前	1			○								1			
		38	精神医学	3前	2			○								2			
		39	小児科学	3前	1			○								1			
		40	脳神経外科学	3前	2			○								2			
		41	救急医学	2前	1				○					1					
		42	薬理学	3前	1			○								1			
		43	医用画像学	2前	1			○						1					
		44	臨床検査学	3前		1		○								1			
		45	スポーツ傷害学	3前		1		○								1			
		46	ペインリハビリテーション	3後		2		○									2		
		47	老年期障害学	3前	1			○								1			
		48	発達障害学	3後	2			○									2		
	保健医療とリ ハビリテ ーション	49	リハビリテーション医学	2後	2			○							2				
		50	生活支援学	1後	2			○					2						
		51	チーム医療学	2前	1			○						1					
		52	感染対策	1前	1			○				1							
		53	医療安全学	2後	1			○							1				
			小計（29 科目）	—	41	4	0	—											

科目区分		掲載 ページ	授業科目の名称	配 当 年 次	単位数			授業形態				学年別 単位数								
					必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実験・ 実習		1 前	1 後	2 前	2 後	3 前	3 後	4 前	4 後	
専 門 科 目	基礎 理 学 療 法	54	理学療法学概論	1前	2			○			必修科目 55 単位 選択科目 2 単位以上 選択	2								
		55	運動療法学	1後	1			○					1							
		56	運動療法学演習	2前	1				○					1						
		57	物理療法学	1後	1			○					1							
		58	物理療法学演習	2前	1				○					1						
		59	日常生活活動学	2後	1			○							1					
	60	日常生活活動学演習	3前	1				○								1				
	障害 の 評 価	61	理学療法評価学	1後	2			○						2						
		62	運動器障害評価法Ⅰ	2前	1				○						1					
		63	運動器障害評価法Ⅱ	2前	1				○						1					
		64	神経障害評価法	2後	1				○							1				
		65	内部障害評価法	3前	1				○								1			
		66	臨床運動学演習	2前	1				○						1					
	理 学 療 法 各 論	67	運動器障害理学療法	3前	1			○									1			
		68	運動器障害理学療法演習	3前	1				○									1		
		69	脳機能障害理学療法	3前	1			○										1		
		70	脳機能障害理学療法演習	3前	1				○									1		
		71	内部障害理学療法	3後	1			○										1		
		72	内部障害理学療法演習	3後	1				○									1		
		73	発達障害理学療法	3後		1			○									1		
		74	神経筋障害理学療法	3後	2			○										2		
		75	脊髄障害理学療法	3後	1			○										1		
		76	地域リハビリテーション	3前	2			○									2			
		77	老年期障害理学療法	3後	1				○									1		
		78	スポーツ傷害理学療法	3後		1			○									1		
		85	理学療法特論	4後		1		○												1
		79	義肢補装具学	3後	2			○										2		
		80	理学療法管理学	4後	2			○												2
		81	理学療法学総合演習Ⅰ	3前	1				○								1			
		82	理学療法学総合演習Ⅱ	3後	1				○									1		
		86	総括セミナーⅠ	4前	1				○										1	
		87	総括セミナーⅡ	4後	1				○											1
		88	理学療法研究	4前		2		○											2	
		臨床 実 習	83	臨床体験実習	2前	1						○				1				
	84		臨床評価実習	3後	3					○								3		
	89		臨床総合実習Ⅰ	4前	8					○									8	
	90		臨床総合実習Ⅱ	4後	8					○										8
		小計（ 37 科目）		—	55	5	0	—				19	21	17	18	19	18	11	12	
合計（ 85 科目）				—	116	19	0	—				小計 40 35 37 23								
											合計	135								
GPA(グレード・ポイント・アベレージ)算出方法																				
GPA＝(GP×単位数)の合計／総単位数【必修科目の履修登録単位数】												1年	2年	3年	4年					
	成績評価	GP(グレードポイント)										必修	30	35	31	20				
A	100－90点	4.3										選択	10	0	6	3				
B	89－80点	4										小計	40	35	37	23				
C	79－70点	3										合計	135							
D	69－60点	2																		
E	59－50点	1																		
F	49－ 0点	0																		
卒業要件及び履修方法											履修科目の登録の上限									
教養教育科目の必修20単位及び選択6単位以上、専門基礎科目の必修41単位及び選択2単位以上、専門科目の必修55単位及び選択2単位以上の合計126単位以上を修得すること。											1年 40単位(年間) 2年以降 39単位(年間) 成績優秀者（前年度の年間GPA3.5以上）は上限がなくなります。									
履修要件																				
1) 必修の未修得科目は、次年度に再履修すること。 2) 「臨床評価実習」を履修するにあたり、「臨床体験実習」を修得しておかなければならない。 「臨床総合実習」を履修するにあたり、3年次までの全必修科目96単位を修得しておかなければならない。																				

科 目 名	心理学
担 当 教 員	金井 桂子
単位、必修・選択	2単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	1年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	人間の行動や心のしくみを理解するために、心理学の歴史や心理学各分野の基礎的知識を習得することを目標とする。日常観察される人間の行動に関心を持ち、観察し、考察する態度を養い、医療の現場で活用できるようにする。具体的には、人間の行動を促す動機、学習と記憶、子供・青年期・成人期の発達、パーソナリティと対人関係などについて教授する。
授 業 の 目 的	心理学はこころの学問であるが、心理学を学ぶということは、人間そのものについての多角的理解を深めることでもある。人間がどのように外界の情報を取り入れ行動しているか、さらに行動の背景にある人間関係を理解し、自己理解や他者（患者）理解、洞察力を深め、さまざまな心理的・身体的状況を生きておられる患者様に対してより良い援助を行なうために、心理学の基礎知識を身につけることを目的とする。
授 業 計 画	1. 心理学とは何か：オリエンテーション、心理学の歴史 2. 感覚と知覚 3. 記憶 4. 思考・言語・知能 5. 学習①：学習とは（古典的条件づけ、オペラント条件づけ） 6. 学習②：主な学習理論と応用 7. 感情と動機づけ（感情の諸相、感情のメカニズム、動機づけ） 8. 性格とパーソナリティ：特性論、類型論、性格の測定 9. 社会と集団 10. 発達①さまざまな発達理論 11. 発達②心の発達段階と発達課題 12. 心理臨床①（心の適応と不適応、ストレス反応、さまざまな心の問題） 13. 心理臨床②：心理療法とカウンセリング 14. 医療職と対人援助（患者の心理・バーンアウト） 15. まとめ
教 科 書	『心理学（カレッジ版）』著 山村 豊、高橋 一公，医学書院，2019. 毎回の授業においてプリント配布
参 考 文 献	特になし。プリント枚数が多いので、ファイル用意してください。
成 績 評 価	前期試験（70%）、授業態度・課題やレポートの提出などにより総合的に評価する。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	健康スポーツ科学
担 当 教 員	加納 希和子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 選択
履 修 対 象・形 態	1 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	科学的根拠に基づいたスポーツや健康の意義について理解することを目標とする。健康スポーツとして心身の健康維持と増進を目的に行われるスポーツ活動が、心身に及ぼす効果を具体的に理解する。また、健康と医科学的観点から、スポーツ活動の効果が生活習慣病等の慢性疾患の予防につながることをふまえて、その効果の基礎的事項を講義し、実際の運動処方に必要な体力測定や運動プログラムの立案等の実技を行い基本的考え方を習得する。
授 業 の 目 的	様々な身体活動や体力測定等を通じ自身の体力やからだについての気付きを高め、日常生活における運動の重要性の理解を深める。また、スポーツを通じ、コミュニケーションスキルを体と心で習得する。さらに、理学療法士が関わることの多い、生活習慣病やロコモティブシンドロームについての基礎知識を習得する。
授 業 計 画	1. オリエンテーション
	2. 健康の定義と概念
	3. スポーツ・運動と健康
	4. スポーツと体力
	5. 体力テスト（実技）体育館で実施します
	6. 運動とからだ①筋・骨格系
	7. 運動とからだ②呼吸循環系
	8. トレーニング概論
	9. 子ども・女性とスポーツ
	10. 高齢者・障がい者とスポーツ
	11. スポーツ種目の実践（実技）体育館で実施します
	12. スポーツ時の安全管理 ※初級パラスポーツ指導員
	13. スポーツ指導に求められる資質 ※初級パラスポーツ指導員
	14. 健康プログラムの立案（グループワーク）
	15. 健康プログラムの立案・発表
教 科 書	必要に応じて資料を配布する。
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	講義で行った内容についての筆記試験（80％）とレポート課題（20％）で評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	心の健康と運動
担 当 教 員	中原 英子
実務教員による授業	基本概念と実務に即した知識と考え方を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	1 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	精神的ストレスや身体的ストレスが病気の原因や誘因となる事はよく知られている。しかし、運動や生活活動にみられる身体的ストレスは適度に行った場合にはかえって健康に貢献する。すなわち、適度のストレスは健康を維持するために必要である。本講義では、心と体の相互関係や運動との関連、ストレスによる生体反応について具体的に講義する。さらにストレス緩和方法といわれている技法が生体に与える影響やメカニズムについて解説し、自他共に心身の健康について考える。
授 業 の 目 的	日常生活におけるストレス要因をとらえるだけでなく、その背景要因を考察し、ストレスへの対処法を考える。まず日常生活で実際に経験するストレスと関連する事象を例示し解説を行う。さらにストレスを受けた時に生じる身体的反応やその機序についても具体的に示したうえで、その対処法を考える。
授 業 計 画	1. ストレスの概念と要因 2. ストレスが身体へ及ぼす影響 3. ストレスと自律神経系 4. ストレスと心血管系 5. 副腎を介したストレスの伝達 6. ストレスと糖尿病・呼吸器疾患 7. ストレスに対する運動の効果 8. ストレスと睡眠・日常生活での注意
教 科 書	講義に関連した資料を随時配布する。
参 考 文 献	講義内で紹介する。
成 績 評 価	後期試験で評価を行う。
事 前 事 後 学 習	受講にあたっては、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	教育学
担 当 教 員	高野 結衣
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	2年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	教育についての概念、哲学・思想から実際の教育目標・内容、方法・技術、教材・教具など教育の理論と実践を理解することを目的とする。教育の基本的概念を身に付け、教育に関する様々な思想を理解し、思想の変遷と多様な教育理念との関わりや、実践的な教育について習得する。
授 業 の 目 的	主に学校教育に関する基本的知識を幅広く学習したうえで、各個人の関心に応じた教育学との接点を発見することを本授業の目的とする。
授 業 計 画	1. オリエンテーション
	2. 教育とは何か
	3. 教育の役割
	4. 教育の歴史と思想①
	5. 教育の歴史と思想②
	6. 教育の制度
	7. 教育の方法①
	8. 教育の方法②
	9. 組織としての学校
	10. 学校安全① 安全管理
	11. 学校安全② 安全教育
	12. 学校安全③ 組織活動
	13. 学校と地域① 地域住民・保護者との連携
	14. 学校と地域② 学校外専門スタッフとの連携
	15. 最終まとめ
教 科 書	特に指定しない。講義にて逐次配布する。
参 考 文 献	適宜、講義中に紹介する。
成 績 評 価	毎回の授業レポート 60%、最終レポート 40%
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	臨床教育学
担 当 教 員	○林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	医学の発展に伴い、医療従事者の生涯学習、自己研鑽は不可欠であり、臨床における卒後教育体制の構築と組織マネジメントは重要である。基本的な教育理念に基づき、医療現場におけるキャリアアップにむけた臨床教育の理念と実践について理解することを目的とする。臨床における教育理念の構築と実践的な教育方法、組織マネジメントについて教授する。
授 業 の 目 的	・臨床現場で後進育成に携わるための知識を習得する。 ・自己のキャリアを形成するために、自己研鑽を継続できる能力を習得する。 ・組織マネジメントに対する理解を深める。
授 業 計 画	1. 教育とは？
	2. キャリアデザインについて①
	3. キャリアデザインについて②
	4. 学習理論について
	5. 理学療法士における生涯学習について
	6. 組織におけるマネジメントについて
	7. 理学療法士に必要な実務管理について
	8. 理学療法士に必要な労務管理について
	9. 臨床現場におけるハラスメントについて
	10. ヘルスコミュニケーションの必要性について
	11. 多職種連携におけるコミュニケーション（IPE/IPW）について
	12. ケーススタディ①
	13. ケーススタディ②
	14. プロフェッショナルとしてのマインドセットについて
	15. 組織におけるリーダーシップについて
教 科 書	講義毎に資料を配布する。
参 考 文 献	『リハビリテーション専門職のための教育学 現場で役立つ「教える技術」』 医歯薬出版株式会社/2021 年
成 績 評 価	講義毎に出題するレポート課題 40% 筆記試験 60%
事 前 事 後 学 習	受講にあたって予習、復習を十分行うこと。

科 目 名	人間関係学
担 当 教 員	高井 範子
単位、必修・選択	2単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	医療や社会福祉などの対人援助サービスでは、情報の正確さや他者の気持ちをありのままに受容する基本的な姿勢は不可欠である。本講義の目標は、正確な情報によるコミュニケーションと好ましい人間関係を築くためのスキル（技能）を実践的に身につけることである。そのために、自らの意見を論理的に述べることや、情報を的確かつ簡潔に伝えるための文章や表現の工夫、他者に対する感受性を豊かにする方法などについて教授する。
授 業 の 目 的	医療や社会福祉などの対人援助サービスでは、広範な年齢層の患者と信頼関係を構築することが重要である。本科目の到達すべき目標は、①発達段階的視点や社会的視点における様々な人間関係の特徴を理解する。②自己理解、他者（患者）理解、他者受容をはじめとして、より良い人間関係を構築するために役立つ知識や技能を修得する。③信頼される医療人となるためにロールプレイングをとおしてコミュニケーションスキルを身につけることである。
授 業 計 画	1. 人間関係学を学ぶにあたって、及び、ネット社会の人間関係
	2. 乳幼児期の親子関係
	3. 幼児期から成人期における人間関係、及び、保健医療チームにおける人間関係
	4. 社会心理学的視点からみた人間関係：自己と他者
	5. 医療現場においてより良い人間関係を構築するための自己理解
	6. 職場における人間関係、職業選択と自己概念
	7. 人間関係の悩みと克服、対人苦手意識の克服
	8. 臨床心理学的視点からみた人間関係、対人関係に関連した精神病理
	9. 親密な人間関係：関係の進展モデル、及び、対人認知要因
	10. 対人援助サービスで活かすカウンセリングの知識と技法（ロールプレイング含む）
	11. 医療現場に活かす説得的コミュニケーション
	12. NBM（narrative based medicine）：物語に基づく医療の視点からの人間関係
	13. リハビリテーション医療における心理的ケア（医療者のあり方）
	14. 患者と医療者の人間関係
	15. 医療者として活用する心理学的知見
教 科 書	『発達・社会からみる人間関係－現代に生きる青年のために』、西垣悦代（編）、北大路書房。
参 考 文 献	『人を育む人間関係論－援助専門職として、個人として』、服部祥子、医学書院、2003。
成 績 評 価	筆記試験（60%）、レポート（20%）、毎回のテーマに関する授業コメントと授業中の課題（20%）等を総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	英語コミュニケーション I
担 当 教 員	仲渡 一美
単位、必修・選択	1 単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	1 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	英語学習に対する動機付けをして、各自の語学能力に自信をもたせることが目標である。基本的な構文の復習や自己表現の手段としての英語学習を行う。特に英文の読解に重点をおいて、基礎的知識を学習する。
授 業 の 目 的	・様々なトピックの英文を読み、文の成り立ちを理解しながら読解力をつける。 ・内容に関して自ら積極的に関わり、クリティカルに考える力を養う。 ・英語理解に最小限必要な基本文法を復習し、リスニング・スピーキング練習を行い日常や医療現場でも応用できる英語の基礎力を身につける。 ・コミュニケーションのための演劇演習において英語で表現することを学ぶ。
授 業 計 画	1. Class Guidance / Unit 1 Everything is new to me. / Be 動詞
	2. Reading/ Unit 1 Ex. Unit 2 Are you in any club? 一般動詞
	3. Reading / Unit 2 Are you in any club? 会話と Ex.
	4. Reading / Unit 3: let me introduce a new member to you. 一般 (過去)
	5. Reading / Unit 3 Ex. Unit 4: I' m looking for a part-time job. 進行形
	6. Reading / Unit 4 会話と Ex. I' m looking for a part-time job.
	7. Reading / Unit 5: What are you going to do? 未来表現
	8. Reading / 演劇 (英語劇) パフォーマンスについて
	9. Reading / Unit 5 Ex. Unit 6: Could you take a look at this? 助動詞
	10. Reading / Unit 6: Could you take a look at this? 会話と Ex.
	11. Reading / Unit 7: I' m so frustrated. 受動態
	12. Reading / Unit7: I' m so frustrated. 会話と Ex.
	13. 演劇ワーク準備・音読テスト
	14. 演劇ワーク発表
	15. 総復習
教 科 書	『Let's Read Aloud & Learn English: for science』 / 角山照彦・Simon Capper 著 /成美堂 /2023年
参 考 文 献	補助教材、参考文献は授業中にプリントを配布します。
成 績 評 価	前期末試験の60%と、小テスト、ホームワーク、発表など授業への参加度40%を合わせて総合的に評価します。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	英語コミュニケーションⅡ
担 当 教 員	George Mackenzie
単位、必修・選択	1単位 選択
履 修 対 象 ・ 形 態	1年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	英語を聞き話すという基本的手法を習得することを目標とする。英会話を習熟するために、会話の基本を知ったうえで、正確な聞き取りと自信を持った話し方を学習する。
授 業 の 目 的	・様々なトピックで学生の発話を促し、英語を聞く力、話す力をつける。 The goal of the class is for students to improve their English listening and speaking skills with various topics.
授 業 計 画	1. Self-Introduction
	2. English Conversation
	3. English Conversation
	4. English Conversation
	5. English Conversation
	6. English Conversation
	7. English Conversation
	8. English Conversation
	9. English Conversation
	10. English Conversation
	11. English Conversation
	12. English Conversation
	13. English Conversation
	14. English Conversation
	15. English Conversation & Review
教 科 書	プリントを配布します。Printed teaching materials are ready.
参 考 文 献	特にありません。Nothing in particular.
成 績 評 価	Interview Test を主にして筆記テストも少し加えます。平常点として小テストや毎回のクラスの参加度も加味して総合的に評価します。 Mainly an interview test, a small written test, and class participation
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。 Before class, you should prepare and review the class.

科 目 名	医学英語
担 当 教 員	仲渡 一美
単位、必修・選択	1単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	2年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	最新の医療情報が必要な医療従事者にとって、英文の医学雑誌やウェブサイトなどから情報を収集する能力は重要である。本講義は、医学・医療に関連する基礎及び臨床分野の英語の学術論文を教材にして、読み方を学び、論文の要旨を理解し報告することができることを目標とする。そのために基礎や臨床分野の論文で多く用いられる医学用語についても教授する。
授 業 の 目 的	・人体の主要な組織についての構造や機能を英語で学び身体用語を習得する。 ・健康の定義や現在の医療をめぐる問題などについて考える。 ・論文のアブストラクトなどを題材に医学論文の読み方の基本を学ぶ。 ・医療現場でP Tが必要とする英語表現や接頭・接尾語から医学用語を身につける。
授 業 計 画	1. The Human Body / Plane and Direction / The parts of the body 2. What is a Cell? / Range of Motion (neck, leg, etc.) The organs 3. Tissue, organ, and system / Range of Motion (hands and fingers) 4. Characteristics of the human body / Range of Motion (Arms and legs) 5. Characteristics of the human body / Range of Motion / Positions 6. The Skeletal System / Positions / Prefix and Suffix of Medical terms 7. The Skeletal System / The structure of Human Skelton / Diseases 8. Exercise Program <Presentation> 概要・グループ活動 9. Joints/ Major joints and Regions of the Body / The Terms of Skelton 10. The Muscular System / The Terms of Muscles/ Symptoms 11. Tendon and ligaments / Reviews of Kinds of Movement 12. Disease and Sickness / What is Narrative Medicine? 13. 英語論文の読み方 Presentation 準備 14. Presentations 15. 英語論文の読み方 Total Review
教 科 書	冊子にしたプリント教材を配布します。
参 考 文 献	補助教材、参考文献は授業中にプリントを配布します。
成 績 評 価	後期試験60%、小テスト、プレゼンテーション、発表など授業への参加度40%を合わせて総合的に評価します。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	キャリアセミナー	
担 当 教 員	○水野 稔基、栗田 剛寧、内藤 卓也	
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。	
単位、必修・選択	1 単位 必修	
履 修 対 象 ・ 形 態	1 年次 通年 演習	
授 業 科 目 概 要	自己実現や社会貢献ができる社会人になるために大学生活における学習や人間関係の構築について理解する。また講義内容の要約やグループ討議を行う。コミュニケーション能力の向上のため日常の学習内容の整理・報告を行い、模範となる形式を習得する。学内・外でのボランティア活動など、社会に参加する上で、特に理学療法士を目指す学生として必要とされるマナーや接遇の講義を取り入れ、大学生活の早期から幅広く人や社会への関連を深めていく。理学療法士業務の理解を進めるため、病院の見学を行う。	
授 業 の 目 的	社会人、医療人としての望まれる言動と行動について、自ら考え、実行していく意識を高める。将来、理学療法士として働くことを念頭に置き、勤務する現場を見学し、必要とされる能力を考える。また、パラスポーツについての学びから、障がいのある方への対応を学ぶ。	
授 業 計 画	1. オリエンテーション	16. 障がいのある方との交流
	2. 自己分析ワーク	17. パラスポーツ推進の取り組み
	3. 社会人マナー・コミュニケーションについて	18. 各障がいのスポーツ指導上の留意点と工夫①
	4. 学習レポートの作成	19. 各障がいのスポーツ指導上の留意点と工夫②
	5. 理学療法士の仕事体験①	20. 全国障がい者スポーツ大会の概要
	6. 医療・福祉業界の動向について①	※3. 16-20 初級パラスポーツ指導員
	7. 医療・福祉業界の動向について②	
	8. 理学療法士の仕事体験②	
	9. 理学療法士の仕事体験③	
	10. 理学療法士の仕事体験④	
	11. 理学療法士の仕事体験⑤	
	12. 医療機関への見学実習オリエンテーション	
	13. 医療機関への見学実習①	
	14. 医療機関への見学実習②	
	15. 実習の振り返り	
教 科 書	『PT・OTのための これで安心 コミュニケーション実践ガイド 第2版』/山口 美和/医学書院/2016年、障がいのある人のスポーツ指導教本，日本パラスポーツ協会編ぎょうせい	
参 考 文 献	なし	
成 績 評 価	複数の課題レポートにより総合評価する。	

科 目 名	統計学
担 当 教 員	幸田 利敬
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 選択
履 修 対 象・形 態	1年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	統計学の基本的な概念を理解した上で仮説検定や推定の方法論を学習することを目的とする。学習目標は統計を用いて表現されたものを理解できるようになることと統計学的にデータ整理ができることである。具体的には①代表値と分布、②平均値の差の検定、③比率の差の検定、④回帰分析、⑤適合度の検定など、医療や保健分野に比較的多用されている統計手法について学習をすすめ、医療情報の信頼性や有用性を考える能力を養う。
授 業 の 目 的	統計学は、医学の分野でも非常に多く活用されている。大量のデータをわかり易く表現し、有効な情報を得るためにも必須のツールとなる。そのため医療従事者が統計学の知識と活用法を知っておくことは大事である。統計学の基礎を身につけ、将来の学習や研究のためにも統計学的手法を知る必要がある。統計学を医学へ応用するための初歩的な考え方と活用手段を身につけることが目的である。授業には、必ず電卓（四則演算、ルート計算、メモリー機能のあるもの）を持参すること。
授 業 計 画	1. 統計学概論、統計学に必要な基礎数学 2. データの尺度・標本分布 3. 記述統計－代表値、正規分布と標準偏差 4. 統計的仮説検定の基礎 5. 検定の基礎－差の検定① 6. 検定の基礎－差の検定② 7. 検定の基礎－差の検定③ 8. 検定の基礎－分割表検定① 9. 検定の基礎－分割表検定② 10. 検定の基礎－相関・回帰分析① 11. 検定の基礎－相関・回帰分析② 12. その他の検定① 13. その他の検定② 14. データのまとめと表現（作表、作図） 15. 国家試験問題への対応
教 科 書	『PT・OTのための統計学入門』/三輪書店 資料を随時配布します。
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	前期試験により評価する。
事 前 事 後 学 習	次回の授業範囲は予告するので、受講にあたって予習を行うこと。 各回の授業で示す練習問題は必ず実施し、復習すること。

科 目 名	情報処理演習
担 当 教 員	三井 哲裕
単位、必修・選択	1単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	1年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	情報理論は通信・記録のためのデータ処理の基礎となる学問である。本演習では、情報とは何か、情報処理とは何か、という情報学の基礎を学び、コンピューターによるデータ処理ができることを目標とする。具体的には、①コンピューターの基本的な仕組み、②人間が計算できる問題・計算理論、③メッセージの長さを短くするための符号化と情報理論等の情報学の基礎的な事項について理解した上で、演習を通じた学習を進める。
授 業 の 目 的	Word を使い、文章の検索や編集技術、イラスト・写真・表等のオブジェクトの編集が出来るようになる。PowerPoint で、簡潔な発表資料をつくりプロジェクトによる表示ができるよう操作を学ぶ。Excel ではデータの表・グラフの作成・表示ができ、分析ツールも使えるようになり、Word、PowerPoint のファイルにリンクして使えるようになる。研究発表に必要な技術を身に付けることを目的とする。
授 業 計 画	1. パソコンの基本操作とセキュリティ 安全対策
	2. Word の入力法 オブジェクト 図形の作成 図形の編集
	3. 文章の編集 箇条書き 段組 縦書き・横書き ページ設定
	4. 書式に合わせた文章作り 出力（印刷、PDF、Web ページ）
	5. Excel の基本(セルへの数値・文字入力、計算式の入力)フィルハンドル
	6. Excel でグラフの作成
	7. Excel の関数の基礎 セルの表示形式
	8. Excel の日付関数と作表（予定表、カレンダー） ユーザー定義の利用
	9. 分析ツールの操作法 度数分布表とヒストグラム 乱数発生
	10. PowerPoint でスライドに文字入力、クリップアートの入力
	11. PowerPoint でアニメーション効果、スライドデザインを使う
	12. PowerPoint でスライドショーを行う プロジェクトの知識
	13. Excel の表・グラフを Word の文章に貼り付ける
	14. PowerPoint のスライドを、Word と Excel で作った資料を使って作成する
	15. 総復習
教 科 書	『30 時間でマスター Office2019』/実教出版企画開発部/実教出版/2019 年
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	パソコンの実技試験
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脳と心
担 当 教 員	三雲 真理子
単位、必修・選択	2単位 選択
履 修 対 象 ・ 形 態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	近年、脳の活動を測定する技術のめざましい進歩とともに、我々の多様なこころの働きを脳から理解することが可能になりつつある。どのようにして目で見えたものが何であるかがわかるのか。どのようにして記憶し、なぜ忘れるのか。どのようにして考えたり、しゃべったりするのか。感情はどこから生まれるのか。人間のこのような精神活動と脳（神経）構造・機能との関連性について理解を深める。
授 業 の 目 的	私達は脳で見たり、聞いたり、味わったり、においを捉えたりしています。また喜び、怒り、悲しみ、楽しみ、悩みなどの心の動き（感情）も脳で起こります。脳の基本的構造や働きについて理解を深め、脳の精密さ、生命の神秘に触れ、普通に生活を送ることができる喜びを感じてください。また、脳の障害により不自由な生活を送られている方が、どのような辛さ、不便さを抱えておられるか、少しでも理解できるような心を育んでください。
授 業 計 画	1. 1. 脳の構造と働き 1－1. 脳の3段階構造と心身相関
	2. 1－2. 脳幹の構造と働き
	3. 1－3. 大脳辺縁系の構造と働き
	4. 1－4. 大脳辺縁系の構造
	5. 2. 脳の細胞と情報の伝達 2－1. 神経細胞と情報伝達
	6. 2－2. 神経伝達物質
	7. 3. 大脳皮質の働き 3－1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(1)－(3)
	8. 3－1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(4)－(6)
	9. 3－2. 機能局在が不明瞭な連合野(1)－(3)
	10. 3－2. 機能局在が不明瞭な連合野(4)－(6)
	11. 4. 右脳と左脳 4－1. 大脳半球機能差
	12. 4－2. 男女の脳の違い
	13. 5. 睡眠と脳波 5－1. 脳波測定について
	14. 5－2. 睡眠段階と脳波
	15. 5－3. レム睡眠とノンレム睡眠
教 科 書	毎回の授業においてプリント配布
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	後期試験 70%、提出レポート 30%から総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	法学
担 当 教 員	戸浦 雄史
単位、必修・選択	2単位 選択
履 修 対 象 ・ 形 態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	法の本質を踏まえ、法についての一般的・基礎的な考え方を学ぶことを目標とする。「法とは何か」についての基礎的な考え方を学び、「法的にものを考える力」を養う。そして、社会生活にかかわる法律問題をはじめ、時事法律問題や現代の法律問題についても教授する。
授 業 の 目 的	法的知識の基礎とその使い方を身につける
授 業 計 画	1. イントロ：何のために「法」を学ぶのか
	2. 法学入門1：法的ルール of 性質と分類
	3. 法学入門2：法律「関係」と法分野
	4. 法学入門3：条文の読み方と「要件」「効果」
	5. 公法概論1：「法源」論と三権分立
	6. 公法概論2：三審制と法手続
	7. 公法概論3：憲法と人権
	8. 民事法概論1：民法の全体像・私的自治の原則
	9. 民事法概論2：物権と債権
	10. 民事法概論3：契約と任意規定・強行規定
	11. 民事法概論4：法律行為と成年後見
	12. 民事法概論5：契約責任と不法行為責任
	13. 医事法概論1：医事法の全体像
	14. 医事法概論2：医療に関わる組織と資格
	15. 医事法概論3：医療行為と責任
教 科 書	『法学入門』／初版／奥田進一・高橋雅人・長友昭・長島光一（編著）／成文堂／2018
参 考 文 献	『医事法入門』／第6版／手嶋豊／有斐閣アルマ／2022
	『コ・メディカルのための医事法学概論』／初版／野崎和義／ミネルヴァ書房／2011
成 績 評 価	授業中に課す課題と後期試験によって評価する
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと

科 目 名	社会福祉学
担 当 教 員	林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	1年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	社会福祉の概念について学び、社会福祉の対象とする問題及びその背景について理解することを目標とする。わが国の社会福祉・社会保障制度、社会福祉の援助の方法論などを学習する。具体的には、①対人援助法、②医療ソーシャルワーク論、③社会福祉法制、④社会保険制度、⑤生活地域における医療・保健・福祉の連携などについて教授し、学生との議論の場も設定して理解を深める。
授 業 の 目 的	現代では社会福祉の領域は非常に広範囲にわたっており、私たちの生活のさまざまな面にかかわっている。理学療法士にとって必要な社会福祉についての基本的な知識を習得するとともに、グループ学習を通して、将来にわたって社会福祉に興味・関心を持てる姿勢を身につけていく。
授 業 計 画	1. 社会福祉の基礎
	2. 社会福祉を取り巻く社会問題
	3. 社会福祉の仕組み
	4. 社会保障、公的扶助
	5. 医療保険制度, グループ学習のオリエンテーション
	6. 高齢者福祉（総論）
	7. 高齢者福祉（介護保険制度・地域包括ケアシステム）
	8. 障害者福祉, 児童福祉, 障害者スポーツ ※初級バラスポーツ指導員
	9. }
	10. }
	11. グループでの学習課題に取り組み、その成果をグループ単位で発表する。
	12. }
	13. }
	14. }
	15. 総括
教 科 書	配布資料
参 考 文 献	適宜配布
成 績 評 価	レポート 10 点、グループワーク 30 点（ワークシート 10 点、発表 20 点）、最終レポート 60 点。成績評価の詳細は第一回目の講義にて発表。
事 前 事 後 学 習	グループワークの前には、テーマについて調べておくこと。

科 目 名	栄養学
担 当 教 員	福井 紀子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	1年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	食生活に栄養の知識を活かし、健康の維持・増進、疾病の予防・治療が図れるよう、栄養に関する基本的事項を理解する。その基本的事項として、栄養の概念、栄養素の構造と機能を概説し、続いて摂食行動、消化・吸収と栄養素の体内動態、さらに3大栄養素である糖質、脂質、蛋白質の栄養について主に臓器および個体レベルで解説する。
授 業 の 目 的	基本的事項である栄養の概念、栄養素の構造と機能、摂食行動、消化・吸収された栄養素がどのように代謝・利用されていくのか。 五大栄養素について理解し、リハ栄養の中心にあるフレイルやサルコペニアの予防に向き合っていける知識を身につける。 また、疾病別の食事療法の概念を学ぶ。
授 業 計 画	1. 栄養とは、三大栄養素と五大栄養素 2. 糖質について 3. タンパク質について① 4. タンパク質について② 5. 脂質について 6. ビタミンとミネラル① 7. ビタミンとミネラル② 8. 第六の栄養素 9. 消化吸収と代謝 10. 食事療法 11. チーム医療 12. 栄養アセスメント 13. 身体計測 14. アスリートの食事 15. まとめ
教 科 書	『イラスト栄養学総論 第9版』/城田知子・田村明・平戸八千代著/東京教学社
参 考 文 献	『糖尿食事療法の為の食品交換表 第7版』/日本糖尿病学会編集著/文光堂
成 績 評 価	前期試験 100 点満点、授業中の様子を考慮。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	生化学
担 当 教 員	高畑 佳史
単位、必修・選択	2単位 選択
履 修 対 象 ・ 形 態	1年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	生命活動を分子レベルで理解するために、生物体を構成する物質の構造、性質、機能、分布、存在状態を調べ、物質の示す生物学的機能の化学構造との関連や生命現象における意義が生化学分野で解析されてきた。本講義では、分子レベルでの生命現象の理解を目標とし、具体的には、細胞の基本構造、糖質・脂質・アミノ酸の代謝、酵素とエネルギー代謝、ビタミンや生体膜、遺伝などについて教授する。
授 業 の 目 的	生命活動を行うために必須である代謝に関して、分子レベルでの理解が求められる。生命を構成する細胞の学習に始まり、一般生化学として、それぞれの代謝（糖代謝、タンパク質代謝、脂質代謝）の理解と、代謝に異常が生じた場合の疾患、症候について習得する。さらに後半では、運動器系としての役割を担う筋骨格系器官を構成する細胞とその働きを学習し、ホルモン、細胞内情報伝達機構と関連づけて筋骨格系の代謝機構について理解を深める。
授 業 計 画	1. 生体の構成要素（１）－ 細胞の役割と構造
	2. 生体の構成要素（２）－ 生体の主要な構成要素とその働き
	3. 生体における化学反応（１）－ 消化と吸収
	4. 生体における化学反応（２）－ エネルギー代謝と化学反応
	5. 糖質の代謝 － 好気呼吸によるエネルギー産生
	6. 糖質の代謝 － 嫌気呼吸によるエネルギー産生
	7. 血糖調節機構と糖尿病
	8. 脂質、タンパク質の代謝
	9. 生体における恒常性
	10. ホルモン・増殖因子・サイトカイン
	11. 硬組織の形成と吸収のしくみ
	12. 細胞内情報伝達
	13. DNA 複製、転写、翻訳
	14. 遺伝子発現の調節
	15. 遺伝子とゲノムの解析（遺伝子工学）
教 科 書	わかりやすい生化学/第5版/石黒伊三雄・篠原力雄 監修/ヌーヴェルヒロカワ/平成29年
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	定期試験（前期）によって評価する。講義は私語を慎み、静粛に受けること。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	公衆衛生学
担 当 教 員	河野 公一、河野 令、横山 浩誉
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	学習の目標は、疾病を予防し、健康を保持し、人類としての身体的、精神的、社会的能力を最高度に発展させるための自然科学および社会医学原理を学び、実地に適応する科学、技術を学習することである。そのため、わが国の疾病構造の変遷を理解し、その要因の解明と対策についての予防医学的視点から広く学習し、さらに生活の場である地域社会における個人と集団の特性を公衆衛生学的手法により認識し将来理学療法士として必要な理論と技術を習得する。
授 業 の 目 的	健康、障害と疾病の概念を説明できる。 環境と健康・疾病との関係を概説できる。 産業保健を概説できる。 地域保健と医師の役割を説明できる。 感染症の予防、食品衛生について説明できる。 生活習慣に関連した疾病を列挙できる。 日本における社会保障・福祉制度を説明できる。 医療保険と公費医療や介護保険を説明できる。 疫学概念と疫学の諸指標について説明できる。などを目的とする。
授 業 計 画	1. 公衆衛生総論、環境保健
	2. 公衆衛生総論、環境保健
	3. 産業保健
	4. 産業保健
	5. 疫学・学校保健
	6. 疫学・学校保健
	7. 人口・保健統計、老人福祉
	8. 人口・保健統計、老人福祉
	9. 成人保健・地域保健
	10. 成人保健・地域保健
	11. 母子保健・口腔保健
	12. 母子保健・口腔保健
	13. 感染症・食品・栄養、国際保健・精神保健
	14. 感染症・食品・栄養、国際保健・精神保健
	15. 医療経済・障害者福祉
教 科 書	『シンプル 衛生公衆衛生学 2025』/小山 洋 監修/南江堂
参 考 文 献	適時紹介する。
成 績 評 価	後期試験による評価。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

目 名	生命倫理
担 当 教 員	行岡 秀和、丸野 元彦
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	自分自身と他者の価値観を考え、医療従事者と患者との間にどのような関係を築いていくべきかを身につけることを目標とする。具体的には、臓器移植、人工授精、人工中絶、ターミナルケア、尊厳死、インフォームドコンセント、臨床研究などのさまざまな問題点について教授する。
授 業 の 目 的	生命倫理の諸問題に知識として触れるだけではなく、「自分自身も当事者になりうる」という意識を持ち、「何が問題であり、どうあるべきか」という容易には答えの出ないことを自分なりに考え続ける力を養うことを目的とする。いじめ・虐待・過労死など現代社会が抱える諸問題について、現状を把握し解決策を模索する。
授 業 計 画	1. 生命倫理と医療、病名告知、インフォームドコンセント、自己決定権（行岡）
	2. 患者の心理、全人的ケア（行岡）
	3. 緩和ケア、ホスピスケア（行岡）
	4. ト라우マ（心的外傷）とその回復支援（行岡）
	5. 安楽死と尊厳死（丸野）
	6. 脳死と臓器移植（丸野）
	7. 臨床と医療倫理（丸野）
	8. 臨床研究における研究倫理（丸野）
教 科 書	特に指定せず、必要に応じて資料を配布する。 主にスライドや映像資料を用いて講義を行う。
参 考 文 献	各回講義内容に合わせ、適宜、関連資料の配布や参考図書の紹介を行う。
成 績 評 価	レポートと後期試験の成績によって評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動器系解剖学
担 当 教 員	林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2 単位 必修
履 修 対 象・形 態	1 年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	身体運動に関する器官として、骨・関節・筋・神経の各部の構造と形態の特徴を学習し、身体運動を理解する基盤を身につけることを目的とする。人体標本等の利用により、立体的な構造のイメージを深める。内容は①解剖学総論(解剖学の歴史、解剖学用語)、②人体の区分、③骨・関節(骨の構造と分類、各部の骨の形態、関節の構造と分類、各部の関節と靱帯)、④筋系(筋の構造と分類、各部の筋の起始と停止、筋の作用と神経支配)、⑤神経系(神経の構造分類)について講義する。
授 業 の 目 的	衰えた運動機能の回復がその主要目的である理学療法学にあつては、骨格や筋肉などの運動器官の解剖学的知識の修得は極めて重要である。授業においては、細胞と組織、骨格系、関節靱帯系、筋系の形態を機能と関連付けながら理解させる。さらに必要に応じて、それらの運動器官の発生や組織学的形態に関する知見を示して総合的な理解を深めさせ、この分野の科学に対する興味と関心を引き出すことを目的とする。
授 業 計 画	1. 解剖学総論：人体の大要、細胞、組織、器官
	2. 骨学総論：骨の組織構造、機能、発生、
	3. 骨学各論：頭蓋骨、脊柱、胸郭
	4. 上肢の骨、下肢の骨
	5. 頭頸部・体幹の関節と靱帯
	6. 上肢の関節と靱帯
	7. 下肢の関節と靱帯
	8. 筋学総論：筋組織の種類、骨格筋の構造と作用
	9. 筋学各論：上肢帯・上腕の筋
	10. 前腕・手の筋
	11. 下肢帯・大腿の筋
	12. 下腿・足の筋
	13. 頭・頸部の筋
	14. 胸・腹部の筋
	15. 背部の筋
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第5版』 医学書院/2020 年 『解剖トレーニングノート』/竹内修二著/医学教育出版社/2016 年
参 考 文 献	『グレイ解剖学 原著第2版』 塩田浩平ら[訳]/エルゼビア・ジャパン/2011 年 『プロメテウス解剖学アトラス』 解剖学総論・運動器系(第2版) /監訳 坂井建雄・松村譲児/医学書院/2011 年 『人体の正常構造と機能』 総編集/坂井建雄・河村克雅(編)/日本医事新報社/2008 年 『ボディ・ナビゲーション～触ってわかる身体解剖～(改訂版)』 A. Biel 著, 監訳 阪本桂造/医道の日本社/2012 年
成 績 評 価	中間試験、前期試験、小テスト等の結果を総合して評価する。
事 前 事 後 学 習	講義に関して、十分な予習と復習をすること。

科 目 名	内臓系解剖学
担 当 教 員	稲垣 忍
単位、必修・選択	2単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	内臓系全般の成り立ちと形態の特徴について理解し、理学療法を学ぶ上での基礎知識を高めることを目的とする。人体標本等の利用により学習する。内容は①循環器系、②呼吸器系、③消化器系、④泌尿器系、⑤内分泌系、⑥生殖器系等の形態の特徴について講義する。さらに、発生学及び組織学的な視点からも理解を深められるように学習する。
授 業 の 目 的	内臓系全般の成り立ちと形態的特徴について理解し、理学療法を学ぶ上での基礎知識を高めることを目的とする。そのために身体の重要な臓器について、人体の概要と構成、消化器系、循環器系、泌尿生殖器系、内分泌系、呼吸器系の分類に従って、形態学的基礎知識を修得する。
授 業 計 画	1. 人体の構成 細胞
	2. 人体の構成 組織
	3. 人体の構成 上皮と 支持組織（結合組織）
	4. 人体の構成 支持組織（軟骨・骨）と筋組織
	5. 内臓の基本構造 管腔臓器と実質臓器、漿膜と線維性膜
	6. 消化器系 1 消化管
	7. 消化器系 2 肝臓・膵臓
	8. 泌尿器系 1 腎臓
	9. 泌尿器系 2 まとめ
	10. 循環器系 1 心臓
	11. 循環器系 2 脈管
	12. 呼吸器系 1 上気道
	13. 呼吸器系 2 下気道
	14. 人体の発生と生殖器系
	15. まとめ
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第6版』/医学書院 ポケット組織学 リサ・リー著、西村書店 2018
参 考 文 献	組織細胞生物学 南江堂 トートラ人体解剖生理学 日本語版 丸善出版 『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学 第5版』/医学書院 グレイ解剖学アトラス エルゼビア
成 績 評 価	中間試験、後期試験、課題などから総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	神経系解剖学(感覚器を含む)
担 当 教 員	稲垣 忍
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	2年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	運動系(錐体路・錐体外路)、末梢神経系(脊髄神経・脳神経・自律神経)、感覚器系(受容器・感覚神経)および感覚伝導系について、その構造と機能を体系的に理解し、理学療法を学ぶ上での基礎知識を高めることを目的とする。単に構造の名称を覚えるのではなく、分子から組織まで系統的に理解することが必要であり、神経系の働きを神経伝達物質や受容体など分子レベルでの理解を深めることを目標に学習する。
授 業 の 目 的	神経系の理解のために、まずは神経系の構造を理解し機能と結び付けて系統的に理解する必要がある。当授業では、理学療法士の仕事に必要な、運動系(錐体路・錐体外路系・小脳)、末梢神経系(脊髄神経・脳神経)、感覚器(受容器・感覚神経・感覚伝導系)に加え、心や身体全体に影響及ぼす脳や自律神経について基礎的な知識を身につける。
授 業 計 画	1. 神経系の発生 2. 神経系の構成、脳室と髄膜 3. 中枢神経系－脊髄 1 4. 中枢神経系－脊髄 2 5. 中枢神経系－脳幹：延髄、橋、中脳、 6. 中枢神経系－小脳 7. 脳神経 8. 中枢神経系－間脳、視床下部と自律神経 9. 中枢神経系－終脳 10. 神経路 11. 感覚器－体性感覚・視覚 12. 感覚器－聴覚・平衡覚・味覚・嗅覚 13. 神経伝達のしくみ(神経伝達物質と受容体) 14. 脊髄神経 15. まとめ
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第5版』/医学書院/2020年
参 考 文 献	『プロメテウス解剖学アトラス』頭頸部/神経解剖(第2版)/監訳 坂井建雄・松村譲児/医学書院/2011年 『人体の正常構造と機能』総編集/坂井建雄・河村克雅(編)/日本医事新報社/2008年
成 績 評 価	中間試験と前期試験によって総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動器系生理学
担 当 教 員	○鵜崎 智史、林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	運動器系の機能を骨格系の生理学の内容として、骨の発生と成長、運動による骨の循環系と神経系の変化、運動による関節包、滑膜と滑液、関節円板と関節半月、関節軟骨などの生理学的変化を学習することを目的とする。筋系の生理学の内容として、運動による骨格筋の血管への変化、骨格筋の微細構造と筋収縮機序、神経筋接合部と神経筋伝達、筋肥大と筋萎縮などの筋系の生理学的変化などが含まれる。神経系の生理学の内容として、構造的に脊髄、脳幹、小脳、基底核、大脳皮質などの階層があり、運動によって身体各部間の情報を伝達する生理学的変化について理解を深める。
授 業 の 目 的	一般に生理学は古くから植物性機能と動物性機能に大きく分類され、体系化されている。本講義においては、その中の動物性機能の主要生理機能である骨格筋と神経感覚器系を中心にその基礎的生理学理論を学習すると共に運動に要するエネルギー獲得機能のメカニズムを学習することを目的とする。
授 業 計 画	1. 細胞の構造と興奮(林) 2. 興奮の伝導・伝達(林) 3. 末梢神経の分類・機能(林) 4. 中枢神経の解剖・機能(林) 5. 脊髄伝導路・反射(林) 6. 睡眠と覚醒・記憶と学習(鵜崎) 7. 感覚概要・体性感覚(鵜崎) 8. 特殊感覚・内臓感覚(鵜崎) 9. 筋と収縮メカニズム(鵜崎) 10. 心筋・平滑筋(鵜崎) 11. 血液(鵜崎) 12. 血液循環、酸塩基平衡(鵜崎) 13. 体液の循環(鵜崎) 14. 呼吸とガス(鵜崎) 15. 腎臓の機能(鵜崎)
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学第6版』/石澤光郎・富永淳執筆 医学書院
参 考 文 献	PT・OT 必修シリーズ 決して忘れない生理学要点整理ノート/佐々木誠一 羊土社
成 績 評 価	後期試験による評価[中間試験：5割、終講試験：5割]
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	内臓系生理学
担 当 教 員	稲垣 忍
単位、必修・選択	2単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	2年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	生体の統合的理解のために内臓器の生理について学習することを目的とする。呼吸器系、循環器系、消化器系、泌尿器系、内分泌系それぞれの機能について学習する。具体的には、呼吸器系では、呼吸運動の制御、運動と換気の機序、ガス交換、肺気量分画などを、循環器系では、心周期と心拍出量の調整、体循環・肺循環、運動時の循環制御などを、消化器系では、消化と吸収などを、泌尿器系では、腎機能、尿の生成機構などを、内分泌系ではホルモンによる様々な影響などについて学習する。
授 業 の 目 的	本講義においては、主要内臓生理機能である生命現象、細胞、循環系、呼吸系、泌尿系、消化・吸収、血液・免疫系、内分泌・生殖系などを中心にその基礎生理学を学習すると共に生命維持の基本的なメカニズムを理解する。
授 業 計 画	1. 生命現象と人体
	2. 細胞 静止膜電位
	3. 神経の興奮と伝導と末梢神経
	4. 神経の興奮と伝導と末梢神経 まとめ
	5. 筋 骨格筋と心筋の興奮と収縮 まとめ
	6. 血液・免疫系
	7. 血液・免疫系 まとめ
	8. 心臓と循環
	9. 心臓と循環
	10. 呼吸 ガス運搬
	11. 呼吸 ガス運搬 まとめ
	12. 尿の生成
	13. 尿の生成・酸塩基
	14. 消化器系 消化・吸収
	15. 消化器系 消化・吸収 まとめ
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学 第6版』/医学書院
参 考 文 献	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 解剖学』5or6版 医学書院 2020年 『トートラ人体の構造と機能』第5版 日本語版 丸善出版、 『イメージできる解剖生理学』2版 2024 メディカ出版、
成 績 評 価	中間試験・前期試験により総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	解剖学実習
担 当 教 員	○稲垣 忍、松野 悟之、水野 稔基
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	1 年次 後期 実験・実習
授 業 科 目 概 要	運動器系及び内臓系解剖学の講義で学習してきた系統解剖学的な知識を人体標本等の観察とスケッチ等によってさらに深めることを目的とする。特に、人体各器官の局所解剖学的な位置関係を中心に学習する。また、体表解剖として学生間で互いの皮膚表面から筋や骨を視診と触診によって確認し、形状や弾力性等を確かめる。
授 業 の 目 的	運動器系解剖学、内臓器系解剖学、神経解剖学においては、講義を聴講することによって人体の構造を機能との関連で理解することを目的としている。これに対して、本解剖学実習においては、組織標本、骨標本、人体模型、人体を用いて、具体的実態として人体の構造を理解する。また、人体の機能を組織構造との関連で理解する。
授 業 計 画	1. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-体幹- (松野)
	2. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-肩甲帯- (松野)
	3. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-肩関節- (松野)
	4. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-肘・手関節- (松野)
	5. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-股関節- (水野)
	6. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-膝関節- (水野)
	7. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-足関節- (水野)
	8. 骨学実習：頭蓋 (松野)
	9. 骨学実習：脊柱 (松野)
	10. 骨学実習：上肢帯 (松野)
	11. 骨学実習：下肢帯 (松野)
	12. 細胞組織学実習 硬骨 (稲垣)
	13. 細胞組織学実習 骨格筋・心筋 (稲垣)
	14. 細胞組織学実習 肝臓 (稲垣)
	15. 細胞組織学実習 腎臓 (稲垣)
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 6 版』 医学書院/2024 年 『運動療法のための機能解剖学的触診技術 下肢・体幹』 (改定第 2 版) メジカルビュー社/2012 年 『運動療法のための機能解剖学的触診技術 上肢』 (改定第 2 版) メジカルビュー社/2012 年 ポケット組織学 リサ・リー著、西村書店 2018
参 考 文 献	『プロメテウス解剖学アトラス』 解剖学総論・運動器系(第 2 版)医学書院/2011 年 『解剖学アトラス 第 3 版』/越智淳三(訳)/文光堂/1990 年 組織細胞生物学 南江堂
成 績 評 価	複数のレポート、実習中の課題、実技・記述式試験などによって総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	実習に関して、十分な予習と復習、実技練習をすること。

科 目 名	生理学実習
担 当 教 員	幸田 利敬
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	2年次 後期 実験・実習
授 業 科 目 概 要	本実習の目的は、運動器系及び内臓系生理学の講義で学習してきたことを生体で確認することである。運動器系では筋・神経系の反射運動、姿勢保持と姿勢反射、随意運動等を学生間で実習し確認する。循環器系では血圧の測定とその調節機能、呼吸器系では肺機能を測定し、運動による生理的变化等を理解する。また、それらの測定で用いる実験機器の取り扱い方やデータの処理やまとめ方を学習する。
授 業 の 目 的	生体の生理機能に関し実験的モデルを通して理解するとともに、その生理機能の動態を評価する方法を身につけることを目的とする。また、実験データの取り扱い方や生命倫理について考える機会を与え、科学的ものの見方、考え方の能力を高める。6グループに分かれ、各実習を2週にわたり行う。
授 業 計 画	1. オリエンテーション(前半)
	2. 呼吸機能検査
	3. 呼吸機能検査
	4. 神経筋の電氣的反応測定
	5. 神経筋の電氣的反応測定
	6. 心電図
	7. 心電図
	8. まとめと発表、オリエンテーション(後半)
	9. 筋電図
	10. 筋電図
	11. 呼気ガス分析装置を用いた代謝活動の分析
	12. 呼気ガス分析装置を用いた代謝活動の分析
	13. 等速性運動機器を用いた筋活動の観察
	14. 等速性運動機器を用いた筋活動の観察
	15. まとめと発表
教 科 書	各実習項目のマニュアルを作成して配布する。
参 考 文 献	『新訂 生理学実習書』/日本生理学会教育委員会/南江堂
成 績 評 価	各実習項目のレポートと実習実施内容、発表、中間試験により総合評価する。再試験は行わない。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、該当する実験の事前学習を十分行うこと。

科 目 名	運動学
担 当 教 員	林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	人間の身体運動に関する基礎知識を学ぶことを目的とする。これまでに学習した四肢や体幹の運動器を中心とした解剖学や生理学等の知識に基づき、姿勢・歩行等の動作、運動制御と運動学習、随意運動と反射運動等について身体運動を可能にしているメカニズムについて教授する。各論として①脊柱・体幹の機能、②肩甲骨・肩の機能、③肘と前腕の機能、④手と手指の機能、⑤骨盤と股関節の機能、⑥膝関節の機能、⑦足の機能等の身体各部の機能について学習する。
授 業 の 目 的	運動力学の基礎を理解し、運動学の基本知識を習得する。また、関節や筋の機能について運動学的観点から理解し、理学療法に必要な知識を習得する。姿勢や歩行の基礎を学習し、動作分析の基本となる知識を習得する。
授 業 計 画	1. 関節・筋の構造と機能、随意運動のメカニズム 2. 生体力学の基礎（物体の運動、運動の法則、力） 3. 生体力学の基礎（てこ） 4. 肩関節の運動学（関節の構造、関節運動） 5. 肩関節の運動学（筋機能） 6. 肘関節の運動学 7. 手関節の運動学 8. 体幹の運動学 9. 股関節の運動学 10. 膝関節の運動学 11. 足関節の運動学 12. 姿勢 13. 歩行（歩行周期、歩行の指標、重心移動、エネルギー消費） 14. 歩行（関節運動、床反力、筋活動） 15. 運動学習
教 科 書	『15 レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト 運動学』/小島 悟編集/中山書店
参 考 文 献	『基礎運動学』/中村隆一 他著/医歯薬出版 『カパンジー機能解剖学』/塩田悦仁 監訳/医歯薬出版 『筋骨格系のキネシオロジー』/島田智明 監修/医歯薬出版
成 績 評 価	中間試験（50％）・定期試験（50％）を総合して評価する。
事 前 事 後 学 習	講義に関して、十分な予習と復習をすること。

科 目 名	病理学
担 当 教 員	小 仲 邦
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	人体の疾病の理解の基礎となる病理発症、進展転帰、病因等、疾病概念の本質を理解することを目的とする。病気になった人の身体に生じている病変、循環障害、退行変性、代謝異常、先天性異常、新生物（腫瘍）、炎症等の疾病がどうして起こるのかその原因を探り、その結果、人体の組織がどう変化しているのかを、個々の代表的な疾病と結びつけて教授する。
授 業 の 目 的	病気の本質を系統的に提示し、病気の成り立ちと症状をもたらす機序を解説する。知ること、理解することの楽しさとともに病理を把握し、臨床医学を学ぶうえで役立つようにすることが目標である。
授 業 計 画	1. 総論Ⅰ 病因、病理検査法・診断法
	2. 総論Ⅱ 退行性病変、変性病変、代謝異常
	3. 総論Ⅲ 循環障害、進行性病変
	4. 総論Ⅳ 炎症、免疫、感染症
	5. 総論Ⅴ 腫瘍
	6. 総論Ⅵ 先天異常、老化
	7. 各論Ⅰ 循環器
	8. 各論Ⅱ 呼吸器
	9. 各論Ⅲ 消化器Ⅰ
	10. 各論Ⅳ 消化器Ⅱ
	11. 各論Ⅴ 内分泌
	12. 各論Ⅵ 泌尿器
	13. 各論Ⅶ 生殖器
	14. 各論Ⅷ 神経系、感覚器
	15. 各論Ⅸ 運動器、皮膚
	授業の最後に小問を実施する。また授業のコメントを提出する。
教 科 書	『わかりやすい病理学 改訂第 6 版』/岩田隆子 監修/南江堂/2016 年
参 考 文 献	病理学コア画像（一般社団法人日本病理学会） http://pathology.or.jp/corepictures2010/index.html
成 績 評 価	受講態度、後期試験の成績を総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	臨床心理学
担 当 教 員	金井 桂子
単位、必修・選択	2単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	臨床における心理学の立場から患者・障害者に対する正しい理解と接し方についての基礎的知識を学ぶことを目的とする。患者・障害者の一般的心理特性、適応・不適応と葛藤、防御機制、依存性、不安定性、抑うつ性、患者・障害者役割などを理解する。日々の臨床を進めるため共感、傾聴、障害受容といったカウンセリングの基本的技法やコミュニケーション技法を教授する。
授 業 の 目 的	患者により良いリハビリテーションを行うためには、先ず患者との間に信頼関係が構築できなければならない。また、患者のさまざまな心理的反応をどう捉えるのかにおいて、医療スタッフや種々の人間関係においても臨床心理学の知見は不可欠である。本科目は、臨床心理学の基礎的理論や代表的な心理療法を学ぶことによって他者理解、患者理解、自己理解につなげることを目的とする。さらに、心理面接のロールプレイングをとおして医療現場で役立つカウンセリングの基本的技法を身につけることを目的とする。
授 業 計 画	1. リハビリテーションのための臨床心理学・オリエンテーション
	2. 心理アセスメントの方法と倫理
	3. 心理検査
	4. 無意識の欲望を探る精神分析
	5. 行動や認知の変容・制御を目指す—行動療法・認知行動療法①
	6. 行動や認知の変容・制御を目指す—行動療法・認知行動療法②
	7. 人間の実現傾向を重視する—クライエント中心療法
	8. さまざまな心理療法的アプローチ—家族療法・森田療法・交流分析①
	9. さまざまな心理療法的アプローチ—家族療法・森田療法・交流分析②
	10. 発達と心の問題—フロイト・エリクソン・ピアジェの理論①
	11. 発達と心の問題—発達障害に対する支援の方法と発達理論②
	12. 認知機能のアセスメントと支援—記憶・注意・遂行機能①
	13. 認知機能のアセスメントと支援—記憶・注意・遂行機能②
	14. 臨床心理学の成り立ちと今後の展望
	15. まとめ
教 科 書	『リハビリテーションのための臨床心理学』著 牧瀬 英幹 南江堂 2021 授業においてプリント配布
参 考 文 献	特になし
成 績 評 価	試験（70%）、授業中の課題提出、レポート、授業時の参加度により総合的に評価する。 授業態度も平常点として評価します。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	内科学
担 当 教 員	小 仲 邦
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	内科疾患の病態基礎及び臨床的知識(診断、検査、治療)を学ぶことを目標とする。具体的には、消化器疾患、内分泌疾患、腎・泌尿器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、代謝疾患等について病因、臨床症状、検査、診断、治療法、予後等を講義する。
授 業 の 目 的	疾患の成り立ちからはじめて、内科疾患の症候、診断、治療ならびに経過・予後を学習する。さらに、理学療法が臨床医学全体の中でどのような位置付けにあるか理解し、内科疾患と理学療法の係わりを学ぶ。
授 業 計 画	1. 臨床医学・内科学概論
	2. 症状・徴候の意義
	3. 環境要因に基づく疾患、中毒
	4. 感染症
	5. 免疫・アレルギー疾患、膠原病
	6. 循環器疾患Ⅰ
	7. 循環器疾患Ⅱ
	8. 呼吸器疾患
	9. 消化器疾患Ⅰ
	10. 消化器疾患Ⅱ
	11. 内分泌疾患
	12. 代謝疾患
	13. 腎・泌尿器疾患
	14. 血液・造血器疾患
	15. 神経・筋疾患
	授業の最後に小問を実施する。また授業内容のコメントを提出する。
教 科 書	『メディカルスタッフのための内科学第4版』/伊藤進他編著/医学出版社/2013 年
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	授業態度、後期試験の成績を総合して評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	整形外科科学
担 当 教 員	森友 寿夫
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	整形外科疾患の基礎と臨床的知識を学ぶことを目標とする。具体的には、整形外科疾患（骨代謝・系統疾患、骨と関節の感染症、炎症性関節疾患、退行性・変性性関節疾患、骨端症・骨壊死、脊椎・脊髄疾患、骨軟部腫瘍、末梢神経障害、神経・筋疾患、先天性疾患等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療法、予後等を系統的に教授し、理解を深める。
授 業 の 目 的	先ず運動器の基礎の理解を深める。その中で骨・軟骨、筋肉、関節はそれぞれ独立したものでなく協調し、互いに影響し合いながら働くことを学ぶ。次に分野毎にどういう疾患があるのか、その病因、病態、生理についての知識を得た上でどのように診断するのか、治療法としてどういう方法があるのかについて理解し、臨床的に活かしていくことを目的とする。
授 業 計 画	1. 整形外科総論 ― 整形外科診断学
	2. 整形外科総論 ― 整形外科治療学
	3. 整形外科各論 ― 外傷学・骨折総論/創傷治癒
	4. 整形外科各論 ― 肩甲帯および肘の疾患
	5. 整形外科各論 ― 前腕、手関節の疾患
	6. 整形外科各論 ― 手の疾患
	7. 整形外科各論 ― 末梢神経損傷
	8. 整形外科各論 ― 頸椎の疾患
	9. 整形外科各論 ― 胸腰椎の疾患
	10. 整形外科各論 ― 股関節および骨盤の疾患
	11. 整形外科各論 ― 膝関節の疾患
	12. 整形外科各論 ― 足・足関節の疾患
	13. 整形外科各論 ― 腫瘍・炎症性の疾患
	14. 整形外科各論 ― 先天性疾患・成長障害
	15. 整形外科各論 ― 国家試験対策
教 科 書	指定なし
参 考 文 献	『はじめての講義 リハビリテーションのための整形外科の歩き方』 (監修：田中 栄、著者：仲村一郎／南江堂)
成 績 評 価	後期試験で評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	神経内科学
担 当 教 員	小 仲 邦
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	神経内科疾患の基礎と臨床的知識を学ぶことを目標とする。具体的には、神経内科疾患（先天異常、感染性疾患、代謝・中毒性疾患、末梢神経障害、変性疾患、脱髄性疾患、血管性疾患等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療、予後等の基本的な理解を深める。これら疾患がもたらす、末梢性麻痺、中枢性麻痺、筋萎縮、運動失調、錐体外路障害、知覚障害、構音障害、嚥下障害、高次脳神経機能障害などの症候、障害が生活活動能力に及ぼす影響について教授する。
授 業 の 目 的	神経内科学の症状と疾患の理解を深めることを目標とする。
授 業 計 画	1. 序論 神経解剖 神経学的検査
	2. 神経症候①（意識・運動）
	3. 神経症候②（不随意運動・失調・感覚）
	4. 脳血管障害
	5. 認知症
	6. ALS/パーキンソン病
	7. 筋ジストロフィー・末梢神経障害
	8. てんかん・感染症・脳性麻痺
	授業の最後に小問を実施する。 また授業の最後に授業内容のコメントを提出する。
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 神経内科学 第5版』/医学書院
参 考 文 献	『病気がみえる VOL7 脳・神経 第2版』/メディックメディア
成 績 評 価	前期試験、授業態度により評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	精神医学
担 当 教 員	鐘本 英輝
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	精神疾患の基礎と臨床的知識を学ぶことを目標とする。精神疾患（統合失調症、うつ病、器質性精神病、中毒性精神病、心因性精神病、神経症、精神発達障害、老年期の精神障害等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療、精神保健等基礎的な知識について教授する。
授 業 の 目 的	精神疾患の基礎と臨床的知識を学び、実臨床における精神疾患を罹患した患者への適切な対応を身につける。
授 業 計 画	1. 精神医学総論 1 2. 精神医学総論 2 3. 器質性精神障害・特に認知症 4. 症状性精神障害・物質関連精神障害 5. 統合失調症 6. 気分障害 7. 神経症性障害 8. パーソナリティ障害 9. 摂食・睡眠などの生理的障害 10. 精神遅滞・発達障害 11. リエゾン精神医学 12. リハビリテーション 13. 司法・福祉など 14. ライフサイクルと精神医学 15. まとめ
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 精神医学 第4版』/上野武治 /医学書院/2015年
参 考 文 献	『看護のための精神医学 第2版』/中井久夫、山口直彦/医学書院/2004年』
成 績 評 価	前期試験（筆記試験）で評価（100%）
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	小児科学
担 当 教 員	仁科 昌久
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	小児疾患の基礎と臨床的知識を学ぶことを目標とする。小児疾患（先天異常と染色体異常、先天性代謝異常、新生児の生理と適応、低出生体重児、代謝異常と内分泌疾患、免疫・アレルギー性疾患、感染症及び呼吸器疾患、血液・腫瘍性疾患、消化器疾患、腎・泌尿器疾患、神経疾患、筋疾患等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療、予後等を教授する。小児の生活環境に及ぼす影響を含め、小児を全人的な観点からとらえていく。
授 業 の 目 的	医療のプロとして、世界に通用する必要な知識を習得することを目的とする。 小児科領域に関しては、何が重要なことかを認知していく事が求められる。 ※ 授業計画は状況に応じて予定を変える事もあります。
授 業 計 画	1. 小児科イントロダクション、小児科概論（1）・小児科概論（2）
	2. 小児生理学（1）・小児生理学（2）
	3. 小児生理学（3）・小児科感染症（1）
	4. 小児科感染症（2）・小児科先天性疾患・代謝疾患（1）
	5. 小児科先天性疾患・代謝疾患（2）・小児科 血液・腫瘍疾患（1）
	6. 小児科 血液・腫瘍疾患（2）・小児科 免疫・アレルギー疾患
	7. 小児科 消化器疾患・小児科 泌尿器疾患
	8. 小児科 神経・筋疾患
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 小児科学 第6版』
参 考 文 献	特になし。
成 績 評 価	授業中の状態と前期試験の総合評価をします。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脳神経外科学
担 当 教 員	丸野 元彦
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	脳神経外科疾患の基礎及び臨床的知識を学ぶことを目標とする。脳神経外科疾患（脳血管障害、頭部・脊髄外傷、脊椎疾患、神経系腫瘍・炎症等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療、予後等について教授する。神経系疾患の診断に必要な画像診断についても、解剖生理と臨床との関連が良く理解できるように解説する。
授 業 の 目 的	脳神経外科疾患の基礎および臨床的知識を学ぶことを目標とする。理学療法を実践する上で必要とされる脳神経外科領域の疾患の基本的な概念を学ぶ。症候、検査法、治療法および予後など疾患についての臨床知識を学ぶ。さらに、チーム医療の一員として他職種とのスムーズな連携を取れるよう学習を深める。
授 業 計 画	1. 総論：脳の構造と機能
	2. 総論：中枢神経の機能と局在
	3. 総論：脳神経検査（画像検査他）
	4. 総論：症候（1） 脳に特異な症候と病態
	5. 総論：症候（2） 認知症
	6. 脳血管障害（1） 脳出血性疾患
	7. 脳血管障害（2） 虚血性疾患
	8. 脳腫瘍（1） 神経膠腫 他
	9. 脳腫瘍（2） 髄膜腫 他
	10. 脊髄・脊椎疾患
	11. 頭部外傷
	12. 先天奇形・水頭症・感染性疾患
	13. 機能的外科・てんかん
	14. がん・神経疾患のリハビリテーション（1）
	15. がん・神経疾患のリハビリテーション（2）
教 科 書	『病気がみえる vol.7 脳・神経』/メディックメディア/2011年
参 考 文 献	『脳神経疾患ビジュアルブック 初版』/学研/2010年
成 績 評 価	前期試験（筆記試験）成績と授業態度と組み合わせて評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	救急医学
担 当 教 員	行岡 秀和
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	救急患者の各種の特殊病態を理解し、それらをもたらす疾患と各々の症状、必要な処置などの知識を習得して、将来医療に携わる者として救急医療に参加できるようになる。さらに、救急患者の緊急度を判断でき、プレホスピタルケアの重要性を理解して、事故発生時の一次救命処置の基本となる人工呼吸法、心マッサージ等の実施法を学習する。
授 業 の 目 的	救急患者は各種の傷病により、迅速な診断・治療を必要としている。このような患者の病態・症状・必要な処置を理解し、重症度・緊急度の判断ができることが重要であり、救急医療に参加できる基本的知識を得る。また、現在の救急医療体制、プレホスピタルケアについて理解する。さらに、突然の心肺停止患者に対して救急蘇生の基本となる人工呼吸法、心臓マッサージなどの実施法を学習する。
授 業 計 画	1. 生と死、死の判定、臓器移植、生命倫理
	2. 心肺停止(原因・病態・予後)
	3. 心肺蘇生法の理論と実際
	4. 救急医療体制
	5. プレホスピタルケア
	6. 災害医療
	7. 緊急度・重症度の判断と対応
	8. 救急処置
	9. 感染対策
	10. 呼吸・循環障害
	11. 意識障害・神経疾患
	12. 消化器・代謝障害
	13. 小児・妊婦の救急疾患
	14. 外傷・熱傷
	15. 異物・中毒・熱中症・低体温
教 科 書	特に定めない
参 考 文 献	『救急医療カラーアトラス』/龍村俊樹 編集/医薬ジャーナル社/2001 年 『ナースのための救急・集中治療』/坂田育弘 編集/メディカ出版/2006 年 『外傷・熱傷患者の鎮痛・鎮静法』/行岡秀和/ICU と CCU 23(10)735-741/1999 年 『病院外心停止後救命例の予後と問題点』/小玉忠知 他/蘇生 24(1)1-4/2005 年 『病院前救護医療の現況』/石見拓 他/日本内科学会雑誌 95(12)18-23/2006 年
成 績 評 価	前期試験 80%、講義内課題レポート 20%を合わせて評定する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	薬理学
担 当 教 員	中原 英子
実務教員による授業	基本的概念ならびに実務に即した知識と考え方を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	医療現場において薬物治療を行っている患者さんにかかわる際、薬物療法がリハビリに何等か影響を与えているか判断する知識を求められる機会は少なくはない。薬物の生体に対する作用に関する基本的知識を修得することを目的とする。
授 業 の 目 的	薬と生体との相互作用の結果起こる現象とその機構など、薬物療法の基礎となる薬理学を講義する。①一般的な薬物の基本知識と薬理学の理解に必要な病態生理の基礎を身につける、②よく使われる薬物の作用とその作用点および作用機序について理解できる、③一般的な薬物の体内動態について理解できる、④薬効に影響する因子について理解できる、⑤神経・筋疾患、精神疾患などの治療薬の作用機序および主作用と副作用について理解できる。
授 業 計 画	1. 薬理学の基礎（分類、体内動態、主作用と副作用、相互作用）
	2. 薬理学の理解に必要な神経系の基本と神経伝達物質
	3. 神経系・筋骨格系に作用する薬（Ⅰ）
	4. 神経系・筋骨格系に作用する薬（Ⅱ）
	5. 抗炎症薬および免疫系に作用する薬
	6. 呼吸器系、消化器系、内分泌系に作用する薬
	7. 心血管系、血液・凝固系疾患に作用する薬
	8. その他（抗悪性腫瘍薬、抗菌薬など）の薬
教 科 書	特に指定しない。
参 考 文 献	講義の中で参考文献や参考図書をご紹介します。
成 績 評 価	前期試験にて評価を行う。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	医用画像学
担 当 教 員	森友 寿夫、丸野 元彦、中原 英子、福田 明雄
単位、必修・選択	1 単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	2 年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	医療機関で使用しているレントゲン・CT・MRI・超音波画像などについて、基本的な構造、臨床的意義、画像読影について理解することを目的とする。また理学療法評価における画像情報の利用についても理解し、基本的な画像評価の方法を習得する。
授 業 の 目 的	医用画像について基本的な知識・技術を習得する。 理学療法評価における画像情報について理解する。
授 業 計 画	1. 整形外科における画像評価①（森友）
	2. 整形外科における画像評価②（森友）
	3. 脳神経外科における画像評価①（丸野）
	4. 脳神経外科における画像評価②（丸野）
	5. 内科における画像評価①（中原）
	6. 内科における画像評価②（中原）
	7. 運動器系理学療法における超音波評価①（福田）
	8. 運動器系理学療法における超音波評価②【演習】（福田）
教 科 書	特に定めない。
参 考 文 献	適宜必要な文献および資料などを紹介する。 『リウマチ性疾患のリハビリテーション医療』大澤傑著/洋學社/2021 年
成 績 評 価	前期試験により評価。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	臨床検査学
担 当 教 員	中原 英子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 選択
履 修 対 象・形 態	3 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	医療スタッフの一員として必要な知識として、臨床検査の臨床的意義を理解し応用能力を身につけることを目的とする。臨床現場で行われる各種臨床検査の測定原理、測定方法、検査値の解釈等について教授する。
授 業 の 目 的	理学療法は広い意味での臨床検査に基づいて実施される。理学療法の対象疾患が拡大しており、理学療法士自身が検査を基に病態を理解し、その場のリスクを判断する能力も求められる。講義では、各種臨床検査、検査値の意義を習得し、医療スタッフとしての知識と実践力を身につけることを目的とする。
授 業 計 画	1. 総論 1（臨床検査の基本）
	2. 総論 2（血液・凝固系）
	3. 総論 3（消化器系・腎臓）
	4. 総論 4（代謝系・炎症）
	5. 総論 5（内分泌系）
	6. 総論 6（循環器系・呼吸器系）
	7. 生理検査（心電図・呼吸機能検査）
	8. 演習
教 科 書	特に指定しない。
参 考 文 献	講義の中で参考文献や参考図書をご紹介します。
成 績 評 価	後期試験により評価をおこなう。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	スポーツ傷害学
担 当 教 員	史野 根生
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 選択
履 修 対 象・形 態	3 年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	わが国におけるスポーツ人口の増加は目覚ましいものがある。現在では幼児から高齢者まで国民の大部分の人が何らかの形でスポーツを行っている。スポーツを行う人の体力や健康状態も様々で、不適当なスポーツ活動による結果、スポーツ傷害も増加している。スポーツ傷害への対策としては、第一に予防が重要であるが、不幸にして起こった傷害は早期に治療を行い、スポーツ活動に復帰できるようにすることが大切である。近年わが国のスポーツ医療界にあってはスポーツに関心を持つ理学療法士が数多く輩出し、自己研修に努めてきている。そのため、スポーツ傷害の成因、病態、診断、そしてスポーツ理学療法を含む治療体系に関する理論や技術を学習する。
授 業 の 目 的	スポーツ傷害の基礎（解剖、生体力学）、成因、病態、診断、そしてスポーツ理学療法を含む治療体系に関する理論や技術を学習する。スポーツ外傷・障害の知識を身につけた理学療法士の育成を目指す。
授 業 計 画	1. スポーツ外傷・障害の総論
	2. 各論：脊椎
	3. 各論：上肢 1
	4. 各論：上肢 2
	5. 各論：下肢 1
	6. 各論：下肢 2
	7. 各論：下肢 3
	8. 各論：筋肉・骨
教 科 書	指定なし
参 考 文 献	スポーツ整形外科学/文光堂/2020 年
成 績 評 価	前期試験による。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	ペインリハビリテーション
担 当 教 員	三木 健司
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 選択
履 修 対 象・形 態	3年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	痛みの発生メカニズム、急性痛と慢性痛、痛みが惹起する心理的变化などを学ぶことを目標とする。痛みは身体に警告を与える重要な感覚の一つであるが、痛みを抱える患者、特に慢性痛で病む患者では生活動作や運動において大きく関わり、生活の質（QOL）を低下させる大きな要因となる。痛みを訴える患者に対し、運動機能や日常生活活動への回復を促すための治療についても教授する。
授 業 の 目 的	授業を受けることにより、1)痛みの基礎的なメカニズムについて、解剖学・生理学・病理学・薬理学などの知識をもとに理解を深めることが出来る。2)痛みが慢性化するメカニズム、痛みを理学療法士がどのように対応するのがよいかを理解することができる。3)運動療法により日常生活での活動量を増やす患者主動型医療がペイン・リハビリテーションの基本であることを理解することが出来る。
授 業 計 画	1. ペインリハビリテーション概論（痛みとは何か） 2. 末梢で痛みを受容するメカニズム 3. 痛みの中枢回路 痛みと情動の回路（前帯状回、島皮質、扁桃体） 4. 痛みに対する薬物療法 5. CRPS（複合性局所疼痛症候群）、帯状疱疹後神経痛、術後痛 6. 痛みの伝達、下降性疼痛調節系、慢性化のメカニズム 7. 線維筋痛症、顎関節症、頭痛、脳卒中後疼痛 8. リハビリテーションにおける痛みの評価の全体像 9. 整形外科的な痛み（腰背部痛、変形性膝関節症、五十肩） 10. がん性疼痛と薬物療法 11. 痛みの評価① 感覚評価、身体機能・活動評価 12. 痛みの評価② 情動・認知評価、社会的・QOL 評価 13. 疼痛に対するリハビリテーション① 急性疼痛 14. 疼痛に対するリハビリテーション② 慢性疼痛 15. ペインリハビリテーションの実際
教 科 書	『ペインリハビリテーション入門』/沖田実・松原貴子（著）/三輪書店 適宜必要な資料を配布しながら授業を進める。
参 考 文 献	『痛みの集学的診療：痛みの教育コアカリキュラム』/日本疼痛学会、痛みの教育コアカリキュラム編集委員会（編）/真興交易(株)医書出版部/2016 年
成 績 評 価	後期試験およびレポート課題によって総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	老年期障害学
担 当 教 員	林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	理学療法の臨床の間では単に疾病の治療やケアのみならず、日常生活活動（ADL）や生活の質（QOL）の向上を視野に入れた包括的な医療が要求されている。本講義では、加齢に伴う身体変化の特性をはじめ、老年者の基本的動作能力の障害を起こす代表的な疾病に関する診断、治療、その経過などの知識を習得し、老年者に起こりうる運動外傷とその障害予防に關しての知識を深める。老年者に対して理学療法を行う場合、健康維持の方法と疾病に伴って起こりやすい合併症について述べる。さらに、社会的な生活自立を促すための支援体制とその福祉・介護事業についても論ずる。 ①老年者を取り巻く社会について、日本の人口推移、死因、政策、経済面などを解説する。また、老年期の身体・社会生活機能の特徴及び代表的な運動器疾患について解説する。②老年期の代表的な内科疾患と合併症、生活習慣病や機能低下予防とリスクマネジメントについて解説する。③老年者に起こりうる運動外傷、運動器の障害の改善方法、生活習慣、老化に伴う機能低下予防、コミュニケーション手段などについて知識と技術を学習する。また、社会参加支援のための福祉・介護事業についても紹介する。
授 業 の 目 的	老年者に対して理学療法を行う場合、健康維持の方法と疾病に伴って起こりやすい合併症や社会的な自立を促すための支援体制とその福祉・介護事業についても理解する。
授 業 計 画	1. 加齢と老化
	2. 高齢者へのアプローチ
	3. 老年症候群①
	4. 老年症候群②
	5. 高齢者に多い疾患
	6. 高齢者のリハビリ・退院支援
	7. 高齢者の終末期医療
	8. 総括
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 老年学』/第5版/大内尉義 編/医学書院/2020 年
参 考 文 献	『老人のリハビリテーション』/第8版/福井園彦 著/医学書院/2016 年
成 績 評 価	前期試験で評定する。
事 前 事 後 学 習	十分な予習と復習をして授業を受講すること。

科 目 名	発達障害学
担 当 教 員	宇野 里砂
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	心身の正常発達過程を理解した上で、その発達を妨げる様々な要因について解説する。特に胎生期、乳幼児期、学童期など、成長発達の各時期における異常発達の特徴を精神的、身体的な観点から学習し、それらの相互の関連性を理解する。また、発達障害の治療概念を講義し、発達障害児をもつ家族の心理面やその対応などについても講義する。
授 業 の 目 的	理学療法士として、障害がある子どもと家族を支援するために必要な基礎知識を習得する。多面的な知識を統合して思考する能力を高める。
授 業 計 画	1. 運動の発達 2. 認知の発達、社会性の発達 3. 言葉の発達、食べる機能の発達 4. 反射と反応 5. 発達評価 6. 脳性麻痺総論 7. 脳性麻痺各論（痙直型四肢麻痺） 8. 脳性麻痺各論（痙直型両麻痺） 9. 脳性麻痺各論（痙直型片麻痺・アテトーゼ型・失調型） 10. ダウン症候群 11. 二分脊椎 12. 筋ジストロフィー 13. 重症心身障害、子どもの呼吸障害 14. 自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、学習症 15. 子どもと家族への支援・連携
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 小児科学 第6版』
参 考 文 献	『小児リハビリテーション医学 第2版』/栗原まな/医歯薬出版/2015年 『やさしく学ぶからだの発達』/林万里（監修）/全国障害者問題研究会出版部/2011年 『やさしく学ぶからだの発達 <Part2>』/林万里（監修）/全国障害者問題研究会出版部/2015年
成 績 評 価	講義態度等（毎講義のコメントペーパー記述内容評価）60%、Google Form 課題（奇数回授業後に提出）40%
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行い、発表や質問を積極的にすること。

科 目 名	リハビリテーション医学
担 当 教 員	林 真太郎、小仲 邦、中原 英子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	2年次 前期・後期 講義
授 業 科 目 概 要	疾病や外傷等によって受けた身体・精神的障害を診断して適切な治療法によりその障害を軽減させ、代償的手段を用いて社会で生活できるようにするための医学について学ぶ。運動器疾患等を受けた患者の残存能力を評価し、運動機能傷害等により生じる二次的障害の軽減や代償手段について講義する。循環器や呼吸器等の内部疾患によって生じた障害に対して、その評価、治療手段、障害と疾患の予後について講義する。また、チームワーク医療について解説し、チームの構築や円滑な運営、チームに参加する医療専門職の役割について講義する。
授 業 の 目 的	本講義では対象となる脳・脊髄の損傷、神経・筋疾患、切断などに対する理解を深め、機能障害、能力低下、社会的不利、社会参加というリハビリテーション(リハ)医学的な観点で疾患を評価・治療することを学び、社会におけるリハ医療の意義を理解させる。さらに、予防医学としてのリハを考え、公衆衛生学的にも社会貢献できる為の基礎知識を身につける。
授 業 計 画	1. リハビリテーション医学、医療の理念、障害、チーム医療
	2. 物理・作業・装具
	3. 自助具・地域リハ・職業リハ
	4. リスク管理、廃用、生理検査、画像、制度法律
	5. パラスポーツについて ※初級パラスポーツ指導員
	6. 身体障害（視覚・聴覚障害を含む） ※初級パラスポーツ指導員
	7. 身体障害（内部障害を含む） ※初級パラスポーツ指導員
	8. 知的障害（発達障害を含む） ※初級パラスポーツ指導員
	9. 精神障害 ※初級パラスポーツ指導員
	10. 脳血管障害・脳外科
	11. 脊髄損傷・腕神経叢
	12. 神経・筋・骨疾患
	13. 腎・小児・スポーツ
	14. 末梢神経・切断・ガン
	15. 高齢者・熱傷
教 科 書	『リハビリテーション医学』安保雅博監修/羊土社/2018年
参 考 文 献	DeLisa's Physical Medicine and Rehabilitation 6th Ed. Wolters Kluwer, 2020 『総合力がつくりリハビリテーション医学・医療テキスト』久保俊一/田島文博総編集、日本リハビリテーション医学教育推進機構、2021
成 績 評 価	後期試験（筆記試験）と授業態度を総合的に判定する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、教科書に従って進めるので予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	生活支援学
担 当 教 員	辻 修嗣
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	生活支援に関連する学術領域としてリハビリテーション工学、福祉工学、支援工学などがあり、高齢者と障害者のための技術開発が、多くの学会と福祉実務者によって行われている。リハビリテーション工学は電子工学や機械工学等の工学的知識・技術のリハビリテーションに活用しようとする学問領域であり、疾病等によって失われた身体機能を補完・代行することで、障害を有する人の全人的な復権を図るプロセスの支援を目的としている。本講義では、障害を受けることで不自由になる生活内容や環境の変化を解説する。また、工学的手法を用いた車いす等の移動手段、義肢・補装具等の姿勢や動作の改善機器、住宅改造関連やコンピュータ・コミュニケーション等に関するリハビリテーション機器の原理や仕組み等について理解し、患者・障害者の在宅での日常生活環境を自立支援するための工学的手法を学習する。
授 業 の 目 的	少子高齢社会で理学療法を実践するにあたって当該分野の基礎的な知識の習得が求められている。異なる専門分野の職種が障害者・高齢者にかぎらず人々すべての幸せな人間関係を築くうえで連絡や協力をするために共通言語としての本講義での知識を持つことが求められる。福祉住環境コーディネーター3級のテキストも活用し、実践的な知識を効率的に習得する。介護予防についても概観する。
授 業 計 画	1. リハビリテーション工学・生活支援工学の定義
	2. わが国における「障害者」の定義
	3. 暮らしやすい生活環境をめざして
	4. 支援機器活用のポイント
	5. 健康と自立をめざして ヘルスプロモーション 認知症予防
	6. 日常生活動作の支援 自助具・義手・義足・装具・ロボットアーム
	7. バリアフリーとユニバーサルデザイン アクセシブルデザイン
	8. 姿勢保持・移乗の支援 スライディングボード リフト
	9. 移動の支援 杖・歩行器・車椅子
	10. コミュニケーション・機器操作・認知障害への支援
	11. 安全・安心・快適な住まい
	12. 人にやさしい生活環境 住環境・都市環境
	13. 安心できる住生活とまちづくり
	14. 障がい者への住環境支援の発表 1
	15. 障がい者への住環境支援の発表 2
教 科 書	『生活環境学テキスト 改訂第2版』/監修 細田多穂 編集 村田伸・岡本加奈子・北島栄二/南江堂/2020年
参 考 文 献	『福祉住環境コーディネーター検定試験 3級公式テキスト 改訂5版』
成 績 評 価	後期試験期間中に試験および発表・提出物などをふまえ総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	チーム医療学
担 当 教 員	中原 英子、西田 斉二
実務教員による授業	基本的概念ならびに実務に即した知識と考え方を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	臨床において治療に関わる多くの医療従事者のなかでも、リハビリテーションに関わる職種がそれぞれの立場から、チーム医療の役割と責務について講義し、意思疎通のとれたチームワークが患者主体の医療においてどのように貢献するかを具体的に学習する。 ①チーム医療のリーダーの立場から、チーム医療について解説し、その目的や役割を学ぶ。また医師の立場から、患者の権利を明確にし、インフォームドコンセント、他のスタッフへの指示や連携のとり方について事例を紹介して解説する。 ②理学療法士の立場から治療の段階的なアプローチ（病期別アプローチ）を踏まえて、リハビリテーションの他職種との連携、クリティカルパスやその運用について事例を紹介して解説する。 ③日常生活場面での治療や支援において、患者と関わる作業療法士、看護師の立場から事例を交えて紹介し、チーム医療における生活に即した支援について解説する。
授 業 の 目 的	医療技術の多様化、先鋭化に伴って、医療従事者の専門は多岐に分化してきた。複数の医療職が共働する事は常態化しているが、真の意味での「協同」が良質な医療サービスを提供するうえでの不可欠の要素である。 真のチーム医療についての意義を理解し、情報の公開や口頭・書面での記録・伝達の技術についても理解を深めていく。また、聞き取りの演習や、理学療法士の役割を具体的に知ることにより、臨床実習にも活用できる知識を習得する。
授 業 計 画	1. チーム医療の意義とその重要性（中原） 2. 患者中心の医療を行う上で医療者に求められる役割（中原） 3. チーム医療に必要な知識と技能（中原） 4. 医療専門職の専門性とその役割（中原） 5. 情報の共有と記録（中原） 6. チーム医療におけるコミュニケーション・スキル（中原） 7. リハビリテーション専門職にとってのチーム医療（西田） 8. 作業療法士の専門性と役割（西田）
教 科 書	特に定めない。
参 考 文 献	講義内で適宜紹介する。
成 績 評 価	前期試験により評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	感染対策
担 当 教 員	日本看護協会 感染管理認定看護師 林 智也
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	1 年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	理学療法士が従事する医療施設や福祉施設を想定した感染対策について学ぶ。注意すべき主な感染症と基本的な対策知識を具体的に紹介し、施設内の感染対策の体制を理解する。また、職員自身の健康管理と職員研修の必要性、日常的な衛生管理の方策等を理解し、施設実習の際の具体的な準備とする。さらに感染症の発生時の状況把握や拡大防止、行政機関との連携などについても紹介する。
授 業 の 目 的	理学療法士が病院または施設にて実習または働く上で必要となる感染対策の基本と知識を理解し、体系的に習得して実践できるようになる。
授 業 計 画	1. 感染対策総論 標準予防策
	2. 感染経路別予防策 手指衛生
	3. 薬剤耐性菌対策 洗浄 消毒 滅菌 アウトブレイク調査
	4. 針刺しおよび血液・体液暴露予防 医療廃棄物
	5. 結核の感染予防 環境整備 リネンの管理
	6. インフルエンザ 水痘 麻疹 風疹 流行性耳下腺炎
	7. 消化器感染症 ノロウイルス感染症 介護施設における感染対策
	8. 新型コロナウイルス感染症
教 科 書	『病院感染対策ガイドライン 2018 年版 2020 年 3 月増補版』 国公立大学附属病院感染対策協議会編集 じほう刊
参 考 文 献	医療機関における新型コロナウイルス感染症への対応ガイド 第 5 版 一般社団法人日本環境感染学会 日本リハビリテーション医学会感染対策指針 COVID-19 を含む 2022 年 2 月 21 日版 公益社会法人日本リハビリテーション医学会
成 績 評 価	授業態度、テストまたはレポート
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	医療安全学
担 当 教 員	横山 浩誉
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	医療の現場はめまぐるしく変化するため、最も守らなければならない「安全」についての知識や技術が必要である。本講義では、医療は常に危険と隣り合わせであることを認識し、医療過誤や院内感染防止等の安全管理能力の向上に努めることを目標とする。インシデントやアクシデントを少しでも減らし、またヒヤリハットの体験をした場合には、専門職として速やかな対応、原因分析・評価等を行い、安全な医療を提供できるように学習する。
授 業 の 目 的	日本では、医療安全について厚生行政の一環として医療安全体制整備の取り組みが行われている。専門職の立場から医療安全についての基本的な知識と実践をケーススタディを交え学習することを目的とする。
授 業 計 画	1. 医療安全とリスクマネジメントの概念（歴史と動向）
	2. 医療におけるリスクマネジメントの基本と方針
	3. 医療事故のメカニズムとその対策
	4. 効率的な医療安全管理
	5. 医療事故に対する倫理と法的問題
	6. 医療のリスクマネジメントのプロセスとその実践（リスクの分析）
	7. ケーススタディ（起こりやすい医療事故とその対策）
	8. 学習内容の振り返りと理解の確認
教 科 書	特に指定しない（資料配布予定）
参 考 文 献	『医療安全とリスクマネジメント』/嶋森好子・任和子著/ヌーヴェルヒロカワ
成 績 評 価	授業への参加状況（20%）および後期試験（80%）
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法学概論
担 当 教 員	辻 修嗣
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	1年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	学生個々の入学志望理由を大切にしながら、理学療法士となる動機付けを行い、将来の目標を明確にすることを目的とする。理学療法士の法律制度、理学療法の対象疾患、評価の概要と治療手段、学問的体系化、理学療法と研究、理学療法の役割と職域、理学療法士としての適性、理学療法と心理的対応等、リハビリテーション医学・医療や地域における理学療法（士）の位置づけ、意味づけについて教授する。
授 業 の 目 的	理学療法の全体像と展開を構造的に理解することを通して、理学療法への興味・関心を高め、その後の学習へのスムーズで能率的な導入を図ること。
授 業 計 画	1. 理学療法とリハビリテーション
	2. 理学療法に関わる法律と倫理
	3. 急性期・回復期での理学療法
	4. 生活期・地域での理学療法
	5. 理学療法研究
	6. 理学療法士の生涯学習とキャリアデザイン
	7. 理学療法士の組織と他職種連携
	8. 疾患と障害の分類
	9. 理学療法プロセス・EBM
	10. 脳血管疾患と理学療法
	11. 運動器疾患・スポーツ傷害と理学療法
	12. 呼吸器・循環器疾患と理学療法
	13. 糖尿病と理学療法
	14. がんとリハビリテーション
	15. 理学療法士の国際活動
教 科 書	講義毎に資料を配布します
参 考 文 献	『理学療法概論 第1版』庄本康治（編）/羊土社/2017年
成 績 評 価	筆記試験 70% レポート課題 30%
事 前 事 後 学 習	理学療法やリハビリテーションという言葉、理学療法士がどのような場所でどのように働いてるかを調べておいて下さい。

科 目 名	運動療法学
担 当 教 員	加納 希和子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	1 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	運動療法を適切に行うための基礎的な知識を習得することを目的とする。理学療法の中核に位置づけられている運動療法の概念についての理解を深め、運動器系解剖学、内臓系解剖学、運動器系生理学、内臓系生理学や運動学等の科目と関連付けながら、基礎的な運動療法について教授する。運動療法の対象疾患・障害、運動療法の適応と禁忌、リスク管理、運動の阻害因子、運動療法の目的と治療計画立案など基礎理論を学習する。
授 業 の 目 的	理学療法の基盤となる運動療法を実施するための基礎理論を習得する。また、関節可動域運動や筋力増強運動などの運動療法の基礎的な知識を習得する。
授 業 計 画	1. 運動と運動療法、運動療法の基礎理論①
	2. 運動療法の基礎理論②
	3. 運動の種類
	4. 関節可動域運動
	5. 筋力増強運動
	6. 持久力増強運動
	7. 協調性運動
	8. バランス運動
教 科 書	『標準理学療法学 専門分野 運動療法学 総論』5 版 /吉尾雅春 監修/医学書院
参 考 文 献	『運動療法学－障害別アプローチの理論と実際』/市橋則明 編集/文光堂
成 績 評 価	定期試験によって評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動療法学演習
担 当 教 員	奥田 真規
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	運動療法学で学習した基礎的な運動療法の目的、作用、適応と禁忌、実施方法と留意点を踏まえ、安全で効果的な運動療法を遂行する技術を習得することを目的とする。学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して関節可動域運動、筋力増強運動、持久力増大運動、協調性改善運動、全身調整運動とリラクゼーション、神経生理学的アプローチ等の計画を立案し実施する。
授 業 の 目 的	運動療法は運動学や解剖学、生理学などを背景に理学療法士にとって必要不可欠な分野である。理学療法士は脳血管疾患や運動器疾患などの患者に対して病態や生活を把握し、適切な運動療法を行わなければならない。実施される運動療法には臨床での経験則に偏らず、経験とエビデンスを統合した効果的な運動療法が求められる。本講義では運動療法の定義や基礎知識、技術について概説し、臨床に即した運動療法の具体的方法について理解することを目的とする。
授 業 計 画	1. 運動療法の概念
	2. 足関節・足部の運動療法（テーピング）
	3. 基本的な運動療法（1）
	4. 基本的な運動療法（2）
	5. 肩関節と肩甲帯の運動療法
	6. 肘関節と前腕の運動療法
	7. 変形性関節症の運動療法（1）
	8. 変形性関節症の運動療法（2）
	9. 脊椎疾患の運動療法
	10. 股関節の運動療法
	11. 膝関節の運動療法
	12. 足関節・足部の運動療法
	13. 脳卒中の運動療法
	14. 切断の運動療法
	15. その他疾患の運動療法・補足
教 科 書	『標準理学療法学 第5版 運動療法学 各論』/吉尾雅春 編集/医学書院/2023 年
参 考 文 献	適時紹介・配布する。
成 績 評 価	前期試験(実技試験 40%、筆記試験 60%)によって総合評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	物理療法学
担 当 教 員	鶴崎 智史
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	1 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	物理療法が及ぼす生体反応とその治療効果を学ぶことを目的とする。物理療法は温熱、音、光線、電気、牽引、徒手（マッサージを含む）等の物理的エネルギーを外部から身体の病体部分に適用し、痛みを和らげ、血液循環を改善し、リラクゼーションをはかるなどの目的で行われる治療法である。運動器系・内臓系解剖学、運動器系・内臓系生理学や物理学等の知識を関連付けながら物理療法の生体反応をまず学習し、温熱・寒冷療法、超音波療法、電気刺激療法、水治療法、牽引療法等の各種療法の目的、作用、適応と禁忌、実施方法と留意点を学ぶ。さらに、物理療法を行う際のリスク管理についても学習し理解する。
授 業 の 目 的	基礎物理学を理解することから物理的エネルギーを理学療法に応用できる能力を身につける。物理的エネルギーの身体への影響を知り、物理エネルギーが治療に応用できることと危険性を多く含んでいることを理解する。 知識の蓄積に終始するのではなく、臨床を支えるため基礎学問にまで理解を求める学習姿勢を身につけ、治療応用への科学的根拠を求めてほしい。
授 業 計 画	1. 物理療法の定義、臨床的意義、概論 2. 温熱・寒冷療法に対する生体反応と影響 3. 物理療法のための病態生理① 4. 物理療法のための病態生理② 5. 電磁波・光線・超音波エネルギーに対する生体反応と影響 6. 電気エネルギーに対する生体反応と影響 7. 力学エネルギーに対する生体反応と影響(牽引、水治療) 8. 総括
教 科 書	適宜配布
参 考 文 献	『最新理学療法学講座 物理療法学/烏野 大, 川村博文/医歯薬出版』, 『EBM 物理療法 原著第4版』/Michelle H Cameron 著, 渡部一郎訳 /医歯薬出版, その他講義内で紹介。
成 績 評 価	後期試験 80 点、小テスト 5 回の平均点 20 点。 成績評価の詳細は第一回目の講義で発表。
事 前 事 後 学 習	講義後の復習を行って小テストにのぞむこと。

科 目 名	物理療法学演習
担 当 教 員	鵜崎 智史
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	物理療法学で学習した各療法の目的、作用、適応と禁忌、実施方法と留意点を踏まえ、生体に対して安全に物理療法を施行する技術を習得することを目的とする。学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して各種療法の計画を立案し実施する。実際に温熱・寒冷療法、超音波療法、電気刺激療法、水療法、牽引療法等の各療法を施行して、どのような生理的变化が生じるかを体験学習する。物理療法機器の適切な取り扱いと管理方法についても学習する。
授 業 の 目 的	物理的エネルギーを理学療法に応用できる能力を身につける。物理的エネルギーの身体への影響を知り、治療に応用できることを理解する。グループワークを中心として物理療法の適応について学習するとともに、物理療法機器の安全な取り扱い方と適切な使用方法について学ぶ。 また物理療法をする側とされる側の両方を体験し、対象者の立場に立った理学療法士の姿勢・態度についても学んでいく。
授 業 計 画	1. 物理療法における臨床推論・リスク管理 2. 物理療法における臨床推論・リスク管理 3. 寒冷療法について（実技：クリッカー，アイスパック） 4. オリエンテーション（実技：ホットパック，マイクロ波） 5. グループワーク（可動域制限に対する物理療法，マイクロ波，ホットパック） 6. グループワーク（可動域制限に対する物理療法，マイクロ波，ホットパック） 7. グループワーク（可動域制限に対する物理療法，マイクロ波，ホットパック） 8. グループワーク（可動域制限に対する物理療法），実技テスト 9. 超音波療法の基本 10. 超音波療法の応用 11. グループワーク（痛みに対する物理療法，練習：超音波） 12. グループワーク（痛みに対する物理療法，練習：超音波） 13. グループワーク（痛みに対する物理療法，練習：超音波），実技テスト 14. 電気刺激療法の基本 15. 電気刺激療法の応用，総括
教 科 書	『最新理学療法学講座 物理療法学/鳥野 大，川村博文/医歯薬出版』
参 考 文 献	授業内で紹介
成 績 評 価	定期試験 70 点、ワークシート＋実技テスト 30 点
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	日常生活活動学
担 当 教 員	加納 希和子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	患者・障害者が日常生活を営むために必要な、食事、排泄、整容、更衣、入浴などの日常生活活動をはじめ、環境も含めた家事動作や移動動作に関して適切な能力障害評価と生活活動指導を行うための基礎的な知識を修得することを目的とする。さらに、機能障害と能力障害を理解し、日常生活活動の障害の概要とその評価、指導法や環境設定等に関して講義する。
授 業 の 目 的	1. 日常生活活動（ADL）の概念を理解し、ADL の範囲と評価項目との関連を学ぶ。 2. ADL 評価の目的を理解し、主な ADL 評価法の概略を学ぶ。 3. 基本動作を含む ADL 動作について学ぶ 4. 歩行補助具や車椅子の機能と適応を理解し、これらの基本的な指導法を学ぶ。
授 業 計 画	1. 日常生活活動（ADL）の概念 2. 日常生活活動（ADL）と障害 3. ADL 評価の目的と方法 4. ADL 評価：Barthel Index と FIM① 5. ADL 評価：Barthel Index と FIM② 6. 基本的動作（起居動作、寝返り、移乗、歩行）とセルフケア① 7. 基本的動作（起居動作、寝返り、移乗、歩行）とセルフケア② 8. ADL を支援する機器と理学療法：自助具・日常生活用具・車椅子（総論）
教 科 書	『Crosslink 日常生活活動学』/臼田滋、編/メジカルビュー社/2020 年
参 考 文 献	『日常生活活動学テキスト 改訂 3 版』/河元 岩男，他編/南江堂/2020 年 『PT・OT ビジュアルテキスト ADL 第 2 版』/柴 喜崇，他編/羊土社/2021 年 『動作分析 臨床活用講座 バイオメカニクスに基づき臨床推論の実践』/石井慎一郎/メジカルビュー社/2013 年 『日常生活活動学・生活環境学 第 5 版』/鶴見隆正 編集/医学書院/2017 年
成 績 評 価	講義中の小テスト(30%)、後期試験（70%）を総合して評価する。
事 前 事 後 学 習	授業に際しては、十分な予習と復習をすること。 理学療法評価学、運動学を復習しておくこと。

科 目 名	日常生活活動学演習
担 当 教 員	加納 希和子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	日常生活活動学で学んだことを基に実技を通して、対象者の日常生活・環境を分析・評価し、生活動作の自立にむけた実践的な理学療法及び指導等について学ぶことを目的とする。本演習では、学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して、食事、排泄、入浴、更衣や整容動作のほか家事動作や移動動作等の能力障害評価や各動作の訓練方法、効率的な介助方法等を実技により教授する。
授 業 の 目 的	本授業の目的は、①代表的な日常生活活動の評価法を学び実践する、②障がい別に日常生活活動や生活関連動作の評価や動作指導、介助方法等を学ぶことである
授 業 計 画	1. ADL と障害
	2. ADL の評価・指導
	3. ADL を支援する機器（歩行補助具）
	4. ADL を支援する機器（車椅子）
	5. 基本的動作（寝返り、臥位移動）
	6. 基本的動作（起居動作、座位保持）
	7. 基本的動作（床上動作、立ち上がり）
	8. 脳卒中片麻痺の ADL 介助方法と指導①
	9. 脳卒中片麻痺の ADL 介助方法と指導②
	10. 脊髄損傷の ADL 介助方法と指導
	11. 神経筋疾患の ADL 介助方法と指導
	12. 関節リウマチの ADL 介助方法と指導
	13. 人工関節術後の ADL 介助方法と指導
	14. その他の疾患の ADL 介助方法と指導
	15. まとめ
教 科 書	『PT・OT ビジュアルテキスト ADL 第2版』/柴 喜崇，他編/羊土社/2021 年
参 考 文 献	『Crosslink 日常生活活動学』/臼田 滋，他編/メジカルビュー社/2020 年 『日常生活活動学テキスト 改訂3版』/河元 岩男，他編/南江堂/2020 年
成 績 評 価	中間試験（50％）レポート課題・定期試験（50％）によって評価する。
事 前 事 後 学 習	授業に際しては十分な予習と復習をすること。

科 目 名	理学療法評価学
担 当 教 員	松野 悟之
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	理学療法の中核を占める障害の種類・程度を国際生活機能分類を基に、診断・評価について学ぶことを目標とする。理学療法での評価の意義、疾病と障害、障害分類の概念と構造等について教授する。また、理学療法での診断評価のすすめ方等、模擬症例を通して障害評価の進め方と障害構造について教授する。
授 業 の 目 的	理学療法士として理学療法評価学の意味を理解し、ICFにより障害構造を把握するとともに、理学療法の目標設定やプログラムの立案方法を学ぶことを目的とする。疾患の予習、問診、検査・測定方法の学習を通して、理学療法臨床推論を行い、目標設定や理学療法プログラム立案の動機づけとなるよう進める。
授 業 計 画	1. 総論（国際生活機能分類：ICF）
	2. 評価の基礎と進め方医療面接と情報収集
	3. 意識障害・全身状態の見方
	4. 画像所見、脳神経
	5. 高次脳機能、気分（うつ・不安）・思考の評価、意欲・自己効力感
	6. 栄養状態の評価、フレイル、姿勢・形態測定
	7. 感覚、痛み
	8. 反射、筋緊張、ROM
	9. MMT、姿勢バランス
	10. 協調性、持久力
	11. ADL
	12. QOL、動作分析運動発達、内臓関連の評価
	13. 理学療法臨床推論・統合と解釈
	14. 目標設定と治療プログラムの立案
	15. 総括
教 科 書	『リハビリテーション基礎評価学第2版』/潮見泰蔵、下田信明編/羊土社/2020年
参 考 文 献	『ICF 国際生活機能分類』/世界保健機構/中央法規出版/2008年 適宜資料を配布する。
成 績 評 価	中間試験（50%）、期末試験（50%）により評定する。
事 前 事 後 学 習	十分な予習と復習をして授業を受講すること。

科 目 名	運動器障害評価法 I
担 当 教 員	○水野 稔基
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	骨格系障害の評価の理論と技術を学ぶことを目的とする。患者・障害者において骨と関節の機能が何の成因で障害されているか、その問題点を捉えるために骨格系の障害を評価し、検討し、理学療法プログラムを設定する必要がある。理学療法における骨格系運動機能評価の位置づけ、運動機能評価の過程、上肢、下肢、体幹の形態測定（四肢長、周計測定）、変形・拘縮に起因する異常アライメントの検査、関節可動域測定などの意義とその方法について教授する。
授 業 の 目 的	機能評価の基本となる機能解剖を踏まえた上で、正常者の評価をおこない、さらに骨格系の障害に対する具体的評価法を学ぶ。上肢、下肢、体幹の全体的形態測定（四肢長、周計測定）、変形・拘縮に起因する異常なアライメントや関節可動域測定などの意義を合わせて学ぶ。
授 業 計 画	1. 評価の意義
	2. バイタルの評価（血圧・脈拍）
	3. 形態測定（四肢長）
	4. 形態測定（周径）
	5. アライメントの評価
	6. 関節可動域（ROM）測定
	7. 肩関節の評価
	8. 肩関節・肩甲帯の評価
	9. 肘関節・手関節の評価
	10. 体幹の評価
	11. 股関節の評価
	12. 膝関節・足関節の評価
	13. 頸部の評価
	14. 関節可動域制限について
	15. まとめ・これまでの総括、実技試験における確認事項
教 科 書	『PT・OTのための測定評価 DVD シリーズ 1 ROM 測定 第3版』/伊藤俊一 他編/ 三輪書店 『リハビリテーション基礎評価学 第2版』潮見泰蔵/羊土社
参 考 文 献	特になし。
成 績 評 価	筆記試験（40%）と実技試験（60%）を総合して評価する。
事 前 事 後 学 習	講義に関して、十分な予習と復習をすること。

科 目 名	運動器障害評価法Ⅱ
担 当 教 員	奥田 真規
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	筋系障害の評価の理論と技術を学ぶことを目的とする。理学療法の対象者の多くは疾病や外傷によって筋機能が低下し、日常生活活動に制限を受ける。筋を働かせないと、筋は小さくなり、廃用性筋萎縮を起こす。理学療法における筋系の運動機能評価の位置づけ、筋系運動機能評価の過程、上肢・下肢・体幹の筋力検査、筋持久力検査、機器を用いた筋機能測定等の意義とその方法について教授する。筋系障害に対する筋機能評価方法（触診、視診、筋力検査、筋持久力検査、筋電図、柔軟性等）の理論と技術等について教授する。
授 業 の 目 的	理学療法における筋系障害の評価の理論と技術を学ぶことを目的とする。筋力低下のメカニズムを理解し、筋系の運動機能評価の位置づけ、評価の方法を講義、演習にて理解し筋系障害に対する一連の評価の流れを習得する。
授 業 計 画	1. 筋力検査の基礎
	2. 徒手筋力検査（肩甲骨の運動）
	3. 徒手筋力検査（肩関節の運動）
	4. 徒手筋力検査（肘関節・前腕の運動）
	5. 徒手筋力検査（手関節・手指の運動）
	6. 徒手筋力検査（上肢まとめ）
	7. 徒手筋力検査（股関節の運動）
	8. 徒手筋力検査（膝関節の運動）
	9. 徒手筋力検査（足関節・足趾の運動）
	10. 徒手筋力検査（下肢まとめ）
	11. 徒手筋力検査（頭頸部の運動）
	12. 徒手筋力検査（体幹の運動）
	13. 機器を用いた筋力検査
	14. 機能テスト・筋の柔軟性評価
	15. 徒手筋力検査（全体のまとめ）
教 科 書	『新 徒手筋力検査法 原著第 10 版』協同医書出版社/2020 年
参 考 文 献	配布資料
成 績 評 価	実技試験 70% 筆記試験 30%
事 前 事 後 学 習	演習に関して十分な予習と復習・実技練習をすること。

科 目 名	神経障害評価法
担 当 教 員	○松田 淳子、松野 悟之
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	神経系障害の評価の理論と技術を学ぶことを目的とする。中枢神経系及び末梢神経系の病変に起因する障害構造の質的变化を把握するために必要な検査及び評価の目的、原理、方法、記録などについて学習する。①神経系の障害によりもたらされる問題点の中でも意識や感覚機能を中心に障害像を具体的に示し、そのとらえ方を解説する。②神経系の機能障害や不調和から生じる運動機能の問題点に対して、協調運動、体勢反射、姿勢反射などの観点から障害像を捉える評価について解説する。
授 業 の 目 的	運動神経・感覚神経などの神経障害に必要な評価の目的を学び、基本的な評価に必要な器具の使用法や技術を身につける。
授 業 計 画	1. 神経系障害の評価の目的と進め方 2. 反射の検査①(随意運動発現のメカニズムと反射機構、深部反射) 3. 反射の検査②(反射の意義と鑑別、表在反射・病的反射) 4. 反射の検査演習 (表在反射・病的反射など) 5. 感覚検査① (体性感覚野の機能と感覚系の伝導路、表在感覚の検査) 6. 感覚検査② (感覚検査の意義と鑑別、深部・複合感覚の検査) 7. 感覚検査の演習 (表在感覚・深部感覚・複合感覚など) 8. 筋緊張の検査 (痙縮の発現機序、静止時筋緊張・動作時筋緊張の検査他) 9. 運動麻痺の評価 (片麻痺の回復過程とその評価, Brunnstrom recovery stage test) 10. 運動失調と協調性の検査(小脳の統御回路、運動失調とその分類、協調運動機能検査) 11. 筋緊張・運動麻痺・運動失調の演習 12. 姿勢反射の検査 (姿勢の中核制御と異常姿勢反射、立ち直り反応と平衡反応の検査) 13. バランステスト(BBT, FRT, TUG, 10m 歩行) 14. 脳神経の検査 15. 高次脳機能の検査 (認知症・失語・失行の概念、半側空間無視・Pusher 症候群など)
教 科 書	『リハビリテーション基礎評価学 第2版』/潮見泰蔵、下田信明 編集/羊土社/2020
参 考 文 献	『ベットサイドの神経の診かた 第18版』/田崎義昭、斎藤佳雄 著/南山堂/2016 『ここがポイント！脳卒中の理学療法』/河村廣幸 編集/金原出版株式会社/2018 『神経診察クローズアップ正しい病巣診断のコツ 第3版』/鈴木則宏 編集/株式会社メジカルビュー社/2020
成 績 評 価	後期試験 (筆記試験)・実技試験を実施し総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	内部障害評価法
担 当 教 員	奥田 真規
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	呼吸器疾患の評価の理論と技術を学ぶことを目的とする。呼吸器機能、呼吸器疾患の障害構造を把握するために必要な検査及び評価の目的、原理、方法、記録などについて学習する。肺気腫等の呼吸器疾患に対する評価（呼吸機能検査、呼気ガス分析、酸素飽和度等）の理論と技術について教授する。心筋梗塞等の心・循環器疾患や糖尿病等の代謝疾患等の評価理論と技術を学ぶことを目的とする。心・循環器機能、代謝機能の障害構造を把握するために必要な検査及び評価の目的、原理、方法、技術、記録などについて教授する。具体的には、脈拍、血圧、心電図、体温、血糖、運動負荷試験等について学習をすすめる。
授 業 の 目 的	内部障害に関する基本的な評価を学び、各病態の評価における理解を目的とする。そして、フィジカルアセスメント及びバイタルサインの評価については、適切に実施し、評価の意義を理解することを目標とする。
授 業 計 画	1. 循環器（心臓）の理解と主な心疾患の病態と評価① 2. 循環器（心臓）の理解と主な心疾患の病態と評価② 3. 循環器（血管）の理解と主な心疾患の病態① 4. 循環器（血管）の理解と主な心疾患の病態② 5. 循環機能を診る 6. 呼吸器の理解と主な呼吸器疾患の病態と評価① 7. 呼吸器の理解と主な呼吸器疾患の病態と評価② 8. 呼吸機能を診る 9. 代謝疾患の理解と主な疾患（糖尿病）の病態① 10. 代謝疾患の理解と主な疾患（糖尿病）の病態② 11. 代謝疾患の理解と主な疾患（腎臓病）の病態① 12. 代謝疾患の理解と主な疾患（腎臓病）の病態② 13. 悪性腫瘍の病態と評価 14. バイタルサイン・フィジカルアセスメント（視診・触診）① 15. バイタルサイン・フィジカルアセスメント（打診・聴診）② 順番は内部障害理学療法演習との関係で変わることがあります。
教 科 書	『PT・OT ビジュアルテキスト内部障害理学療法学』松尾善美編集/羊土社/2016 年
参 考 文 献	『理学療法テキスト 内部障害理学療法学 循環・代謝 第2版』/木村雅彦 編集/中山書店/2017 年、 『理学療法テキスト 内部障害理学療法学 呼吸 第2版』/木村雅彦 編集/中山書店/2017 年
成 績 評 価	終講試験:100%（筆記試験:80%、実技試験 20%）で評定。
事 前 事 後 学 習	受講にあたり、教科書を活用して予習復習を必ず行うこと。

科 目 名	臨床運動学演習
担 当 教 員	栗田 剛寧
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	運動学等の基礎知識を臨床的に応用することを目的とする。患者・障害者の関節可動域障害、筋機能障害、神経筋機能障害の諸現象の問題点を解剖学、生理学、運動学などの知識を前提として臨床医学と関連させて評価・分析する方法を教授する。また、姿勢や歩行、種々の生活動作での変化の特徴やその原因を考察できるように学習する。臨床運動学の理解によつて的確な運動療法の治療計画と実施の能力を身につける。
授 業 の 目 的	人間の基本的動作である寝返り、起き上がり、立ち上がり、歩行について形態学的、運動学的、生体力学的な視点から観察・分析方法を習得し、臨床実習で担当する対象者の方が安全で有利な動作を選択できるよう基本を学んでいく。また、対象者の問題点抽出や治療計画立案までの思考過程を明らかにする手段として、疾患別の特徴的な姿勢や動作の観察・分析方法を学ぶ。
授 業 計 画	1. 生体力学の基礎
	2. 姿勢の評価と分析①
	3. 姿勢の評価と分析②
	4. 歩行について①
	5. 歩行について②
	6. 異常歩行について
	7. 歩行観察・分析
	8. 寝返り動作
	9. 起居動作
	10. 立ち上がりと着座動作
	11. 計測装置による分析①（三次元動作解析、床反力計）
	12. 計測装置による分析②（三次元動作解析、床反力計）
	13. 高齢者の姿勢・動作分析
	14. 変形性股関節症・膝関節症患者の姿勢・動作分析
	15. 脳卒中片麻痺患者の姿勢・動作分析
教 科 書	『動作分析 臨床活用講座』メジカルビュー/石井慎一郎/2013 年
参 考 文 献	『改訂第 2 版臨床歩行分析ワークブック』メジカルビュー/2017 年 『観察による歩行分析』/医学書院/2005 年 『15 レクチャーシリーズ 臨床運動学』/中山書店/2015 年 適宜必要な文献及び資料などを配布する。
成 績 評 価	課題レポート（20%）、中間（40%）・期末（40%）試験により総合評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動器障害理学療法
担 当 教 員	辻 修嗣
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	脊椎および上肢・下肢等の骨・関節系障害の基礎的知識を得たうえで、骨・関節系の障害に対する理学療法を学ぶことを目的とする。脊椎の疾患（変形性脊椎症、椎間板ヘルニア、筋・筋膜性腰痛症、側彎症）、上肢の骨・関節疾患（骨折、慢性関節リウマチ、切断等）、下肢の骨・関節疾患（骨折、変形性股関節症、変形性膝関節症等）について、機能評価（関節可動域テスト、筋力テスト、日常生活活動検査等）、理学療法のプログラム設定と治療の実際について教授する。
授 業 の 目 的	基本的な運動器疾患に関する基礎知識を学び、疾患の病態を理解する。また、病態を考慮した運動器障害の評価と治療が行えるための基礎的知識を習得する。
授 業 計 画	1. 運動器障害の基礎知識
	2. 変形性股関節症の病態と理学療法
	3. 変形性膝関節症の病態と理学療法
	4. 骨折総論・下肢骨折の病態と理学療法
	5. 大腿骨頸部骨折の病態と理学療法
	6. 頸椎疾患・関節リウマチの病態と理学療法
	7. 腰部疾患の病態と理学療法
	8. 膝靭帯損傷の病態と理学療法
教 科 書	『運動器障害理学療法学 改訂第3版』/細田多穂 監修/南江堂 『明解 スポーツ理学療法』 三輪書店/小柳磨毅・境 隆弘・三谷保弘・松尾高行編集
参 考 文 献	『TEXT 整形外科学』/糸満盛憲・他 編集/南山堂
成 績 評 価	定期試験（100％）により評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動器障害理学療法演習
担 当 教 員	辻 修嗣
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	3年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	運動器障害理学療法で学んだことを基に実技を通して、対象者の運動器障害を分析・評価し、実践的な理学療法及び指導等について学ぶことを目的とする。本演習では、学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して、機能評価（関節可動域テスト、筋力テスト、日常生活活動検査等）、治療を実技により教授する。
授 業 の 目 的	上肢・下肢および脊椎等の運動器障害の基礎的知識を理解する。そのうえで、代表的な運動器の疾患については、理学療法をおこなう上での機能評価が可能となり、疾患の病態を把握できるようになる。さらに、プログラムを設定し、治療が実践できることを目的とする。
授 業 計 画	1. 運動器障害の評価と治療
	2. 変形性股関節症の評価と治療
	3. 変形性膝関節症の評価と治療
	4. 下肢骨折の評価と治療
	5. 大腿骨頸部折の評価と治療
	6. 脊椎圧迫骨折の評価と治療
	7. 腰痛の評価と治療
	8. 膝靱帯損傷の評価と治療
	9. 手関節疾患の評価と治療
	10. 肘関節疾患の評価と治療
	11. 肩関節周囲炎の評価と治療
	12. 腱板損傷の評価と治療
	13. 肩関節疾患の評価と治療
	14. 足部疾患の評価と治療
	15. 運動器疾患の画像評価
教 科 書	『運動器障害理学療法学 改訂第3版』/細田多穂 監修/南江堂 『明解 スポーツ理学療法』三輪書店/小柳磨毅・境 隆弘・三谷保弘・松尾高行編集
参 考 文 献	『TEXT 整形外科学』/糸満盛憲・他 編集/南山堂 『リハで読むべき運動器画像』/塩野寛大 監修/メジカルビュー社
成 績 評 価	定期試験（70%）・実技試験（30%）により総合評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脳機能障害理学療法
担 当 教 員	松田 淳子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	脳腫瘍や頭部外傷等の様々な脳障害の中で、理学療法の対象として頻度の高い脳血管障害に起因する片麻痺を中心に障害の評価と理学療法の基本的な治療方法について学ぶことを目的とする。 ①脳血管障害に関する基本的な知識、片麻痺の評価（身体機能・高次脳機能・ADL と QOL）について、その意義を含めて講義する。 ②片麻痺の理学療法（運動療法・装具療法・発症後の各時期に合わせたアプローチ・二次障害の予防と対処）、片麻痺の予後等を学習し、系統的な理学療法が実践できるよう教授する。
授 業 の 目 的	1. 理学療法士が関わる脳機能障害の病態を理解する。 2. 対象者の障害を理解し、可能性を探れるようになるために、 ①中枢神経系の解剖を復習する。 ②基本的な脳画像の見方を学ぶ。 ③中枢神経疾患の病態と回復過程、および回復に必要な関わりを学ぶ。
授 業 計 画	1. 脳機能障害の定義と病態～脳血管障害～ 2. 脳機能障害の定義と病態～脳外傷など～ 3. 脳機能障害の画像をみるために～基本的な解剖の復習～ 4. 脳機能障害の画像をみるために～臨床でよく出会う画像を学ぶ～ 5. 患者さんを理解するために脳のシステムを復習する 6. 患者さんを理解するために脳のシステムを知る 7. 脳機能障害の回復過程 8. 脳機能障害の回復を促す関わり ＊順番は脳機能障害理学療法演習との関係で変わることがあります。
教 科 書	『Crosslink 神経障害理学療法学Ⅰ』/鈴木俊明、他編/メジカルビュー
参 考 文 献	『脳卒中理学療法の理論と技術 第4版』/原寛美、吉尾雅春編/メジカルビュー 『病気が見える vol.7 脳・神経 第2版』/メディックメディア その他、講義内で随時紹介します。
成 績 評 価	講義内で行う小テスト・講義内課題（30%）、前期試験（70%）、で判定します。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脳機能障害理学療法演習
担 当 教 員	松田 淳子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	脳機能障害理学療法で学んだことを基に実技を通して、対象者の脳機能障害を分析・評価し、実践的な理学療法及び指導等について学ぶことを目的とする。本演習では、学生間で患者と治療者の役割を決め、脳血管障害に起因する片麻痺を想定して、機能評価（身体機能・高次脳機能・ADL と QOL 等）、治療（運動療法・装具療法・発症後の各時期に合わせたアプローチ・二次障害の予防と対処）を実技により教授する。
授 業 の 目 的	1. 脳機能障害に起因する障害を理解する。 2. 脳機能障害を有する対象者を評価できるようになる。 3. 脳機能障害を有する方のリスク管理を理解する。 3. 脳機能障害を有する対象者に対する運動療法を知る。 4. 脳機能障害を有する対象者に合併しやすい症状と理学療法を知る。
授 業 計 画	1. 脳機能障害の一次性 impairments と二次性 impairments 2. 脳機能障害と評価（1）運動機能評価 3. 脳機能障害と評価（2）総合評価 4. 脳機能障害と評価（3）小脳症状その他の評価 5. 脳機能障害と評価（4）評価のまとめ 6. 脳機能障害の病態とリスク管理 7. 急性期の理学療法 8. 脳機能障害者の理学療法に必要な歩行補助具と補装具の理解 9. 脳機能障害者に対する立位・歩行練習～意義と方法～ 10. 脳機能障害者に対する課題指向型アプローチと運動学習の進め方 11. 高次脳機能障害と理学療法士のかかわり（1） 12. 高次脳機能障害と理学療法士のかかわり（2） 13. 脳機能障害における合併症と理学療法 14. 症例から学ぶ 15. 症例から学ぶ
教 科 書	『Crosslink 神経障害理学療法学Ⅰ』/鈴木俊明、他編/メジカルビュー
参 考 文 献	『脳卒中理学療法の理論と技術 第4版』/原寛美, 吉尾雅春編/メジカルビュー 『標準理学療法学 神経理学療法学第2版』/医学書院 『ここがポイント！脳卒中の理学療法』/河村廣幸編/金原出版 その他、随時講義内で紹介します。
成 績 評 価	講義内で行う小テスト、前期試験、講義内課題等で総合的に判定します。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	内部障害理学療法
担 当 教 員	奥田 真規
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	呼吸器疾患の病態と症状、呼吸器障害の機能評価、運動機能評価、理学療法プログラムと理学療法技術について習得することを目標とする。呼吸障害に対する理学療法について、その特徴と運動機能との関連及びリスク管理について解説する。代表的な循環器及び代謝障害の病態と症状、機能評価、運動機能評価、理学療法プログラムと理学療法技術について習得することを目標とする。循環障害、代謝障害による運動機能の障害について解説し、理学療法の概略を解説する。また運動療法を進めるにあたり、内部障害によるリスク管理について解説をする。
授 業 の 目 的	主な内部障害の疾患に関する基礎知識を学び、各疾患特性に応じた理学療法の理解を目的とする。 内部障害に対する理学療法について、その特徴及びリスク管理についての意義を理解することを目標とする。
授 業 計 画	1. 心疾患（心筋梗塞、心不全等）における理学療法の考え方①
	2. 心疾患（心筋梗塞、心不全等）における理学療法の考え方②
	3. 呼吸器疾患（閉塞性・拘束性・外科術後）における理学療法の考え方①
	4. 呼吸器疾患（閉塞性・拘束性・外科術後）における理学療法の考え方②
	5. 酸素療法について
	6. 代謝疾患の理解と主な疾患（糖尿病・腎不全）における理学療法の考え方
	7. 悪性新生物（がん）の病態理解と理学療法の考え方
	8. 内部障害領域における主な胸部画像の特徴
	順番は内部障害理学療法演習との関係で変わることがあります。
教 科 書	『呼吸・心臓リハビリテーション』/高橋哲也、間瀬教史編著/羊土社/2013 年 『内部障害リハのための胸部・腹部画像読影のすすめ』美津島 隆、山内克哉監修/メジカルビュー社/2017 年
参 考 文 献	『理学療法診療ガイドライン』日本理学療法士協会 編/株ガイアブックス/2015 年 『初学者のための呼吸理学療法テキスト』/堀竜次 編集/メディカ出版/2010 年
成 績 評 価	終講試験（100％）で評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたり、教科書を活用して予習復習を必ず行うこと。

科 目 名	内部障害理学療法演習
担 当 教 員	奥田 真規
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	内部障害理学療法で学んだことを基に実技を通して、対象者の内部障害を分析・評価し、実践的な理学療法及び指導等について学ぶことを目的とする。本演習では、学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して、機能評価、運動機能評価、治療を実技により教授する。
授 業 の 目 的	内部障害における基礎知識を学び、各疾患に応じた理学療法を理解し、リスク管理のもと適切な運動処方ができることを目的とする。 最終的には実習および国家試験において、必要な知識や能力の習得を目標とする。
授 業 計 画	1. 心疾患における理学療法①
	2. 心疾患における理学療法②
	3. 心疾患における理学療法③
	4. 心疾患における理学療法④
	5. 呼吸器疾患における理学療法①
	6. 呼吸器疾患における理学療法②
	7. 呼吸器疾患における理学療法③
	8. 呼吸器疾患における理学療法④
	9. 吸引療法と運動処方①
	10. 吸引療法と運動処方②
	11. 吸引療法と運動処方③
	12. 基本的な心電図の見方
	13. 代謝性疾患における理学療法①
	14. 代謝性疾患における理学療法②
	15. 内部障害理学療法のまとめ
	順番は内部障害理学療法との関係で変わることがあります。
教 科 書	『呼吸・心臓リハビリテーション』/高橋哲也、間瀬教史編著/羊土社/2013 年 『内部障害リハのための胸部・腹部画像読影のすすめ』美津島 隆、山内克哉 監修/メジカルビュー社/2017 年
参 考 文 献	『PT・OT ビジュアルテキスト 内部障害理学療法学』/松尾善美 編集/羊土社/ 2016 年 『理学療法診療ガイドライン』日本理学療法士協会 編/株ガイアブックス/2015 年
成 績 評 価	終講試験:100%（筆記試験:80%、実技試験 20%）で評定。
事 前 事 後 学 習	受講にあたり、教科書を活用して予習復習を必ず行うこと。

科 目 名	発達障害理学療法
担 当 教 員	堅田 志保、吉田 真司、佐藤 邦洋、長谷川 智子、山根 果鈴
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 選択
履 修 対 象・形 態	3 年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	代表的小児疾患を中心に、発達障害の特徴と基本的な評価方法や問題の捉え方を学び、運動療法を主とした理学療法手技について習得することを目的とする。特に、発達障害の評価方法の実技、脳性麻痺児のタイプ別理学療法、両親の関わりを含めた環境設定等についても学習し、系統的な理学療法が実践できるよう教授する。
授 業 の 目 的	1. 小児疾患の治療を理論的に推論し解釈する。 2. 代表的な小児疾患を中心に発達障害の基本的な問題の捉え方と理学療法の展開について理解する。 3. 姿勢コントロールと随意運動コントロール評価と分析を習得する。
授 業 計 画	1. ボバース概念の創始と変遷 2. 脳性麻痺治療におけるシステム理論の理解（求心性システムと遠心性システム） 3. 脳性麻痺治療につながる正常発達の理解 4. 脳性麻痺と脳血管障害の治療における共通点 5. 実技 姿勢コントロールの理解 体幹のコントロール （骨盤の選択的運動・肩甲帯の選択的運動・多関節の運動連鎖） 6. 実技 姿勢コントロールの理解 体幹のコントロール （骨盤の選択的運動・肩甲帯の選択的運動・多関節の運動連鎖） 7. 実技 姿勢コントロールと随意運動コントロールの理解（効率的な運動） 8. 脳性麻痺のタイプによる治療の理解 9. 実技 痙直型四肢麻痺の治療 10. 実技 痙直型両麻痺の治療 11. 実技 片麻痺の治療 12. 実技 低緊張、失調の治療 13. 実技 アテトーゼの治療 14. 成人脳血管疾患の治療の理解・実技 片麻痺の治療 15. 実際の治療から考える
教 科 書	『イラストでわかる小児理学療法 第1版』/上杉雅之 監修/医歯薬出版
参 考 文 献	『理学療法ハンドブック』/協同医書 『脳麻痺の運動障害』/医歯薬出版 『片麻痺の評価と治療』/医歯薬出版 『脳性まひの類型別運動発達』/医歯薬出版 『英国ボバース講師会議によるボバース概念』/ガイアブックス
成 績 評 価	後期試験（筆記試験）とレポート。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	神経筋障害理学療法
担 当 教 員	鎌田 理之、加藤 直樹、木原 一晃、松本 ゆかり
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	3年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	神経筋疾患や難病に対する障害の評価と基本的な理学療法を学ぶことを目的とする。具体的には、①神経筋障害に関する基本的な知識、②神経筋障害の評価方法、③神経筋障害別理学療法、④特に難病に対してはケアに配慮した理学療法、⑤生活活動能力や機能的予後等を学習し、系統的な理学療法が実践できるよう教授する。
授 業 の 目 的	神経筋疾患や難病に対する障害の評価と基本的な理学療法、具体的には、①神経筋障害に関する基本的な知識、②神経筋障害の評価方法、③神経筋障害別理学療法、④特に難病に対しては医学的リハビリテーションの観点に基づいた理学療法、⑤生活活動能力や機能的予後、リスク管理等を学習することを目的とする。
授 業 計 画	1. 神経筋疾患の理学療法総論 2. 運動失調症に対する理学療法：脊髄小脳変性症を中心に① 3. 運動失調症に対する理学療法：脊髄小脳変性症を中心に② 4. パーキンソン病（症候群）に対する理学療法①：総論（臨床経過、重症度） 5. パーキンソン病（症候群）に対する理学療法②：障害像の把握、評価 6. パーキンソン病（症候群）に対する理学療法③：目標設定、プログラム 7. 運動ニューロン疾患に対する理学療法：筋萎縮性側索硬化症（ALS）を中心に① 8. 運動ニューロン疾患に対する理学療法：筋萎縮性側索硬化症（ALS）を中心に② 9. 末梢神経障害に対する理学療法：総論、単ニューロパチー 10. 末梢神経障害に対する理学療法：多発ニューロパチー 11. 筋疾患に対する理学療法：筋ジストロフィー症 12. 筋疾患に対する理学療法：筋炎 13. 症例提示 14. その他（トピックス紹介など） 15. 総括
教 科 書	特に定めない。
参 考 文 献	（雑誌）『Journal of Clinical Rehabilitation』/医歯薬出版 『ヒトの動きの神経科学』/松村道一、小田伸午 監訳/市村出版/2002年 『標準理学療法学・作業療法学 神経内科学 第5版』/医学書院/2019年 『標準理学療法学専門分野 神経理学療法学』第2版/吉尾雅春 編/医学書院/2018 『パーキンソン病の理学療法』第2版/奈良勲 監修、松尾善美・石井光明 編/医歯薬出版/2020年 『ベッドサイドの神経の診かた 第18版』/田崎義昭、斉藤佳雄 著/南江堂/2016年
成 績 評 価	後期試験、小テスト等により総合評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、復習を十分行うこと。

科 目 名	脊髄障害理学療法
担 当 教 員	鎌田 理之、加藤 直樹、木原 一晃、松本 ゆかり
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	脊髄疾患に対する障害の評価と基本的な理学療法を学ぶことを目的とする。脊髄に関する解剖、生理学の復習、疾患の特徴を振り返り、理学療法（運動療法）が適応となる問題点を現在の医学で考え得るレベルで明確にし、理学療法技術へと進める。また脊髄疾患の機能予後予測に合わせて、理学療法だけにとどまらず、リハビリテーション医療の観点から種々のアプローチについても、症例提示・検討等も交えながら教授する。
授 業 の 目 的	脊髄損傷を主とした脊髄疾患に対する障害の評価と基本的な理学療法、具体的には、①脊髄障害に関する基本的な知識、②脊髄障害の評価方法、③脊髄損傷（疾患）の障害別・病期別理学療法、④生活活動能力や機能的予後、リスク管理等を学習することを目的とする。
授 業 計 画	1. 脊髄障害理学療法総論： 疫学、脊椎・脊髄の構造と機能
	2. 脊髄損傷に対する理学療法： 症候、障害、神経合併症など
	3. 脊髄損傷に対する理学療法： 総合評価(ASIA)、機能予後予測など
	4. 脊髄損傷に対する理学療法： 急性期の理学療法（呼吸理学療法含む）
	5. 脊髄損傷に対する理学療法： 回復期の理学療法
	6. 脊髄損傷に対する理学療法： 不全脊髄損傷に対する理学療法
	7. 脊髄障害に対する理学療法： 多発性硬化症、脳腫瘍（脊髄腫瘍など）
	8. その他（トピックス紹介など）、総括
教 科 書	『Crosslink 理学療法学テキスト神経障害理学療法学Ⅰ 脳血管障害、頭部外傷、脊髄損傷 第Ⅰ版』/鈴木俊明、中山恭秀 編/メジカルビュー社/2018 年
参 考 文 献	『動画で学ぶ脊髄損傷のリハビリテーション』/田中宏太佳ら編/医学書院/2010 年 『脊髄損傷理学療法マニュアル 第3版』/岩崎洋 編/文光堂/2020 年 『PT マニュアル 脊髄損傷の理学療法 第3版』/武田功 編著/2017 年 『神経筋疾患・脊髄損傷の呼吸リハビリテーションガイドライン』/日本リハビリテーション医学会 監/ http://www.jarm.or.jp/wp-content/uploads/file/member/member_publication_isbn9784307750400.pdf （最終閲覧日：2021 年 3 月 1 日）
成 績 評 価	後期試験、小テスト等により総合評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって予習、復習を十分行うこと。

科 目 名	地域リハビリテーション
担 当 教 員	鵜崎 智史、松尾 薫
実 務 教 員 に よ る 授 業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位 、 必 修 ・ 選 択	2単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	病院をはじめとした医療機関での治療から、施設や在宅での継続的な医療や介護領域における理学療法士の役割と意義を学習する。疾患の回復期から維持期のとらえ方を理解し、理学療法士以外の職種との連携を密にしてリハビリテーションチームとして、さらに地域社会も含めた対象者やその家族への心身への関わりを具体的に学習する。 ①地域リハビリテーションの意義と理学療法の役割、地域リハビリテーションの歴史的、社会的背景、社会保障制度の変遷について解説する。②地域リハビリテーションの流れ、障害の捉え方、介護予防について解説する。また、グループ訓練やレクリエーション指導の方法、地域リハビリテーションの事例を紹介する。③地域における施設での理学療法をはじめ、リハビリテーションの意義と役割を解説する。④通所リハビリテーション施設を通じた、地域社会におけるリハビリテーションの役割を解説する。
授 業 の 目 的	障害の発症から維持期に至るまで、障害とともに、住み慣れた地域で生活していくうえで一貫した理学療法が行われることが必要である。また、その時期に応じた理学療法が求められる。在宅生活の継続、地域での生活という意識の一般化に対して、制度や機関も整備されつつある。同時に、理学療法士も、地域の中で生活するための援助としての理学療法のあり方を学ぶ必要がある。
授 業 計 画	1. 地域リハビリテーションの総論（鵜崎） 2. 地域理学療法の概念（鵜崎） 3. 地域理学療法の関連制度と関連法規（医療保険、介護保険制度など）（鵜崎） 4. 地域理学療法の関連制度と関連法規（地域包括ケアシステムなど）（鵜崎） 5. 住宅環境整備とリスクマネジメント（鵜崎） 6. 住宅環境整備とリスクマネジメント（鵜崎） 7. 住宅環境整備（グループ学習）（鵜崎） 8. 予防理学療法（鵜崎） 9. 住宅環境整備の実際（鵜崎） 10. 通所リハビリテーション施設を通じた地域社会のリハビリの役割を解説する。（松尾） 11. 個人対応と集団対応について運動療法の展開について学ぶ。生活習慣病対策、ターミナルケアと運動療法について理解する。（松尾） 12. 地域における連携において特に在宅への準備について、カンファレンス、自宅への訪問、住宅改造、社会資源の活用について学ぶ。（松尾） 13. 地域における連携での特に施設の取り組みについて、施設間連携、介護予防事業所との連携について扱う。（松尾） 14. 生活環境の整備（住宅改修、福祉用具）について事例から理解を深める。（松尾） 15. 総括（鵜崎）
教 科 書	『ビジュアルレクチャー 地域理学療法学 第3版/浅川育世/医歯薬出版』
参 考 文 献	適宜配布。
成 績 評 価	定期試験 80 点 課題 20 点。成績評価の詳細は第一回目の講義で発表。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって予習、復習を十分行うこと。

科 目 名	老年期障害理学療法
担 当 教 員	水野 稔基
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	老化によって身体には形態的、機能的側面に変化が生じる。本演習では、老人疾患にみられる症状、病態、予後の理解をはじめ、特有な姿勢の変化と運動機能、呼吸機能、排泄機能、嚥下機能などの障害を学び、それらの障害に応じた評価法と理学療法を習得することを目的とする。障害の評価に基づいて、老人の生活自立に向けた系統的な健康管理や地域社会参加を促進するため、医学的管理の下に機能訓練などの理学療法技術を実践できるように教授する。 ①老化による運動機能の障害の評価法と理学療法の実践を教授する。 ②老化による内部障害などの障害の評価と理学療法の実践を教授する。
授 業 の 目 的	老年期の障害の評価に基づいて、老人の生活自立に向けた系統的な健康管理や地域参加を促進するため、医学的管理下に運動療法などの理学療法技術を実践できるように演習する。
授 業 計 画	1. 総論 2. 廃用症候群 3. 退院支援 4. 在宅における全身管理とリハビリテーション 5. 終末期リハビリテーション，脳卒中のリハビリテーション 6. 神経変性疾患のリハビリテーション 7. 呼吸器疾患のリハビリテーション 8. 運動器疾患のリハビリテーション 9. 併存疾患と管理（認知症，せん妄） 10. 高齢者のがんリハビリテーション 11. 高齢者に多い問題①（低栄養，嚥下障害，フレイル・サルコペニア） 12. 高齢者に多い問題②（排尿障害，感染症・発熱，転倒） 13. リスク管理（意識障害，浮腫，血圧変動，不整脈，めまい） 14. 症例検討 15. 総括
教 科 書	『高齢者のリハビリテーション実践マニュアル』/宮越浩一 編/MEDICAL VIEW/2014 『高齢者に対する予防的運動介入』/松尾善美 編/文光堂/2022
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	後期試験、講義内課題、授業態度等から総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	授業に際しては十分な予習と復習をすること。

科 目 名	スポーツ傷害理学療法
担 当 教 員	栗田 剛寧
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 選択
履 修 対 象・形 態	3 年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	スポーツ活動中に生じたスポーツ傷害に対する理学療法を学ぶことを目標とする。スポーツ傷害とその評価、理学療法の意義、適切な運動と禁忌、スポーツ傷害の予防方法などについて学習する。スポーツリハビリテーションチームの一員としてスポーツ分野で理学療法士が活躍するためには何が必要なのかを事例を挙げて教授する。
授 業 の 目 的	スポーツ傷害における評価と理学療法を学ぶことを目的とする。評価、理学療法の方法を講義、演習にてスポーツ傷害に対する一連の流れを習得する。
授 業 計 画	1. スポーツ傷害理学療法学総論 2. 各論：種目別スポーツ傷害 3. ：【メディカルリハビリテーション】膝関節(ACL 損傷など) 4. ：【メディカルリハビリテーション】足関節(内反捻挫など) 5. ：【メディカルリハビリテーション】肩関節(腱板損傷・投球障害など) 6. ：【メディカルリハビリテーション】その他下肢疾患 7. ：【メディカルリハビリテーション】その他上肢疾患 8. 演習：フィジカルチェック 9. ：【アスレティックリハビリテーション】腰部疾患への対応 10. ：【アスレティックリハビリテーション】股関節疾患への対応 11. ：【アスレティックリハビリテーション】上肢疾患への対応 12. ：【アスレティックリハビリテーション】発育期特有の障害への対応 13. 演習：【テーピング】膝関節 14. 演習：【テーピング】足関節 15. 演習：【症例検討】
教 科 書	必要に応じて資料を配布する。
参 考 文 献	
成 績 評 価	レポートにより評価する。
事 前 事 後 学 習	講義に関して予習・復習・実技練習を十分行うこと。

科 目 名	義肢補装具学
担 当 教 員	○奥田 真規、大垣 昌之、高木 啓至
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	3年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	障害者の残存能力の有用性を引き出し、日常生活活動機能を補うために義肢、装具、自助具などが処方される。本講義では、リハビリテーションに欠かすことができない福祉用具であり、障害者の自立支援用具として重要な義肢、装具、自助具についての基本的な知識について学習することを目的とする。そのため、義肢、補装具の名称・種類・分類・構造・材質・適応疾患について教授する。①義肢と補装具の適合判定、上肢と下肢切断者の術前と術直後の訓練方法について教授する。②義肢補装具の装着方法、装着時の問題点抽出、疾患・障害別適応と使用方法を講義し、理学療法での活用方法を実技をまじえて教授する。また、簡単な補装具の作製演習をとおして、個別適応と応用性を身につける。
授 業 の 目 的	運動器障害の代替手段である義肢補装具を具体的に学ぶことで理学療法の幅が大きく拡大する事を目的とする。各障害に適応する義肢、装具、自助具の実践的な理学療法での活用方法を理解する。
授 業 計 画	1. 切断と義肢の基礎知識 アライメントの概念（浜岡） 2. 大腿義足・下腿義足（浜岡） 3. 下肢切断と義足装着前理学療法（浜岡） 4. 義足装着理学療法と応用動作（浜岡） 5. 義手と上肢切断（浜岡） 6. 上肢装具と自助具、車椅子、歩行補助具（浜岡） 7. 装具使用によるエビデンス（大垣）※演習形式 8. 装具の臨床活用（大垣）※演習形式 9. 装具検討の実際1（大垣）※演習形式 10. 装具検討の実際2（大垣）※演習形式 11. 回復期・生活期の装具の実際（大垣）※演習形式 12. 大腿切断：大腿義足の構造および異常歩行（高木）※演習形式 13. 大腿切断：断端管理（弾性包帯・断端機能トレーニング）（高木）※演習形式 14. 大腿切断：模擬義足を用いた義足歩行の体験（高木）※演習形式 15. 義肢装具の支給体系とチームアプローチ（浜岡）
教 科 書	『理学療法 M00K17 理学療法技術の再検証 科学的技術の確立に向けて』/福井勉・神津玲・大畑光司・甲田宗嗣/三輪書店/2015 年
参 考 文 献	『義肢装具学 第4版』/川村次郎ほか 編/医学書院 『15 レクチャーシリーズ義肢学』『15 レクチャーシリーズ装具学』/中山書店
成 績 評 価	後期試験（筆記試験）で評価する（100%）。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法管理学
担 当 教 員	○行岡久美子、幸田利敬、福田明雄、井上泰博、田中和子、森山ゆかり、山下美穂、 鶴崎智史、松田淳子、辻 修嗣
単 位、必修・選択	2単位 必修
履 修 対 象・形 態	4年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	医療保険制度、介護保険制度を理解し、職場管理、理学療法教育に必要な能力を養うとともに、職業倫理を高める態度を養うことを目的とする。本講義では、リハビリテーション部門における管理業務や施設内の卒後教育システム、医療安全マネジメントなどについて教授する。
授 業 の 目 的	1. 医療保険制度、介護保険制度を理解する。 2. 職業倫理についての理解を深める。 3. 医療安全マネジメントを学ぶ。 4. リハビリテーション部門における管理業務や卒後教育について学ぶ。
授 業 計 画	1. リハビリテーションにおける管理学と関連法規（総論）
	2. 職業倫理
	3. リスク管理（1）理学療法におけるリスク管理
	4. リスク管理（2）人間関係
	5. リスク管理（3）ハラスメント
	6. 理学療法と記録
	7. 医療機関における管理・運営（1）多職種連携の考え方
	8. 医療機関における管理・運営（2）医療保険制度と理学療法
	9. 医療機関における管理・運営（3）職場管理と卒後教育
	10. 介護保険関連施設における管理・運営（1）介護保険制度と理学療法
	11. 介護保険関連施設における管理・運営（2）共働する職種の役割
	12. 臨床実習における管理・運営（1）養成校
	13. 臨床実習における管理・運営（2）臨床実習施設
	14. 臨床実習における管理・運営（3）主たる実習施設について
	15. 研究における管理・運営
教 科 書	15 レクチャーシリーズ理学療法管理学（中山書店）
参 考 文 献	随時、授業内で紹介する。
成 績 評 価	講義内で行う課題、後期試験で評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分に行うこと。積極的に参加すること。

科 目 名	理学療法学総合演習 I
担 当 教 員	松野 悟之
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	3 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	臨床場면을想定し、学内授業で習得した障害評価の知識や技術を統合し、疾患と障害との関係や障害と生活環境の関連等を学習することを目的とする。障害評価を総合的に理解するために、模擬症例やグループ学習を多く取り入れ、思考能力と実践力を養う。
授 業 の 目 的	1. 身体機能の評価について、既修範囲を復習し、実践能力を高める。 2. 疾患を想定し、検査・測定を実施できるようになる。 3. 検査の意義を理解し、各障害に関する知識を統合する。 4. 動作観察から問題点を想起できるようになる。
授 業 計 画	1. 疾患名を考慮した評価立案（ボトムアップ）、情報収集（他部門・カルテ等） 2. 疾患を想定した視診・触診、筋緊張評価、反射検査 3. リスク管理（バイタル、起立性低血圧、転倒、脱臼、バルーンの扱いなど） 4. 臨床場면을想定した片麻痺検査、感覚検査、形態測定 5. 臨床場면을想定した ROM、整形外科テスト 6. 臨床場면을想定した MMT 7. 臨床場면을想定したバランス能力の評価 8. 臨床を想定した認知・注意機能検査 9. 臨床を想定した ADL 評価 10. 臨床を想定した姿勢バランスの評価 11. 臨床を想定した姿勢・動作観察・分析 12. 臨床を想定した歩行観察・歩行分析 13. 臨床推論①（整形外科疾患を想定） 14. 臨床推論②（脳卒中片麻痺患者を想定） 15. 授業総括・試験対策
教 科 書	『リハビリテーション基礎評価学第2版』/羊土社/潮見泰蔵 編 『動作分析 臨床活用講座バイオメカニクスに基づく臨床推論の実践』メジカルビュー社 編著 石井 慎一郎
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	中間試験（30%）、期末試験（30%）、実技試験（40%）を総合して評価する。
事 前 事 後 学 習	講義に関して、十分な予習と復習をすること。

科 目 名	理学療法学総合演習Ⅱ
担 当 教 員	○松野 悟之、松田 淳子、幸田 利敬、鵜崎 智史、栗田 剛寧、水野 稔基、加納 希和子、辻 修嗣、奥田 真規、林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	3年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	学内授業で習得した各障害の理学療法の知識や技術を統合し、主要な疾患を中心に、障害レベルに応じた理学療法の目標と治療プログラムの立案と具体的な実施方法について学習することを目的とする。効果的な理学療法（治療）を実施するため、模擬症例やグループ学習を多く取り入れ、思考能力と実践力を養う。
授 業 の 目 的	1) 臨床実習に必要な知識と技術を習得する。 2) ポートフォリオを作成できる能力を身につける。 3) 客観的臨床能力試験に必要な知識と技術を習得する。
授 業 計 画	1. 講義ガイダンス・理学療法における治療プログラムの作成と立案（松野） 2. 大腿骨転子部骨折の病態理解と評価（辻） 3. 慢性閉塞性肺疾患の病態理解と評価（奥田） 4. 脳卒中片麻痺の評価（松野） 5. 小脳性失調症の評価（松田） 6. パーキンソン病に対する理学療法（水野） 7. 変形性膝関節症患者の疼痛評価（林） 8. 足部疾患の評価（加納） 9. 腰部疾患の評価（栗田） 10. 関節リウマチの病態理解と評価（幸田） 11. 肩関節疾患の評価（鵜崎） 12. } 以下の事項を実施する。 13. } 事前学習 14. } 病院実習 15. } 病院実習発表会
教 科 書	配布資料
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	中間試験（40%）、期末試験（40%）、実技試験（20%）を総合して評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習・実技練習を十分行うこと。

科 目 名	臨床体験実習(地域理学療法実習)
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松野 悟之、鶴崎 智史、栗田 剛寧、水野 稔基、 加納 希和子、辻 修嗣、奥田 真規、林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	2 年次 前期 実習
授 業 科 目 概 要	見学や体験を基本として、主に通所リハビリテーション（通所リハ）や訪問リハビリテーション（訪問リハ）の内容および理学療法を学ぶ。状況に応じて臨床実習指導者の指導のもと、通所リハや訪問リハにおける理学療法の一部等を経験する。今後の学習意欲と目的を明確にする。病院または施設の臨床実習指導者が本学教員と連携し臨床実習指導を行う。
授 業 の 目 的	生活期の高齢者、障害のある方の問題点を知り、理学療法士の役割を理解する。 地域リハビリテーションにおける通所リハビリテーション訪問リハビリテーションの機能と役割を理解する。 社会人としての態度を学び、他社との適切なコミュニケーションが取れるようになる。
授 業 計 画	1 週間を通じて、以下の事項を実施する。 ・通所リハビリテーション、訪問リハビリテーションにおける理学療法士の業務や他職種の業務を学ぶ。 ・実習指導者の判断で、可能であれば対象者の障害像とらえるため、問診及び診療録等から情報を収集する。また、可能であれば理学療法の基本的評価を実習指導者の監視の下で体験する。 ・実習指導者の指導の下で、対象者の介助(送迎や入浴、食事など)の体験やレクリエーションプログラムの立案、実施を体験する。 【課題】①実習日誌 ②実習時間管理表 ③感想文 ※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと。 ※ 特別演習及び実習前のオリエンテーションには必ず出席すること。 ※ 実習へ行く前に、1 学年で学習した専門基礎系の内容の確認テストに合格すること。
教 科 書	特に定めない。
参 考 文 献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する。
成 績 評 価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する。
事 前 事 後 学 習	実習にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	臨床評価実習
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松野 悟之、鶴崎 智史、栗田 剛寧、水野 稔基、 加納 希和子、辻 修嗣、奥田 真規、林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位 、 必 修 ・ 選 択	3単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	3年次 後期 実習
授 業 科 目 概 要	理学療法業務の見学、理学療法評価の体験、基本的動作の介助体験及び担当症例の理学療法評価を実施することで、理学療法の意義や役割を深く理解し、基本的な評価技術を習得、理学療法評価のプロセスを理解することを目的とする。また、対象者やその家族および医療スタッフとの関わりから、コミュニケーション能力の向上を目指す。病院または施設の臨床実習指導者が本学教員と連携し臨床実習指導を行う。
授 業 の 目 的	・実習指導者の指導のもと、情報収集、観察、検査・測定、統合と解釈、問題点の抽出、目標設定を体験し、患者様の障害像が理解できること。 ・基本的な評価技術を習得すること。
授 業 計 画	○3週間を通じて、以下の事項を実施する。 ・理学療法業務の見学 ・症例の評価 ・症例の治療の補助 ・実習日誌の作成 ※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと。 ※ 実習前のオリエンテーションには必ず出席すること。
教 科 書	特に定めない。
参 考 文 献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する。
成 績 評 価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する。
事 前 事 後 学 習	実習にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法特論
担 当 教 員	○辻 修嗣、南野 博紀
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 選択
履 修 対 象・形 態	4 年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	近年、理学療法は様々な分野にて発展し、理学療法士の活躍の場、役割は拡大し、多岐にわたる知識・技術が必要となっている。国内外での臨床経験の豊富な理学療法士より、高齢者、身体障害者、発達障害者等の地域における実践的な理学療法を教授する。
授 業 の 目 的	実践的な理学療法の技術・知識を習得する。 卒業後のキャリアデザインをする。
授 業 計 画	1. 障害者スポーツ支援Ⅰ（南野）
	2. 障害者スポーツ支援Ⅱ（南野）
	3. 科学的根拠に基づいた運動療法Ⅰ（辻）
	4. 科学的根拠に基づいた運動療法Ⅱ（辻）
	5. 超音波エコーを用いた理学療法評価Ⅰ（辻）
	6. 超音波エコーを用いた理学療法評価Ⅱ（辻）
	7. 高齢者を対象とした理学療法Ⅰ（辻）
	8. 高齢者を対象とした理学療法Ⅱ（辻）
教 科 書	適時資料を配布する。
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	レポート課題によって評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	総括セミナー I
担 当 教 員	○松野 悟之、松田 淳子、幸田 利敬、鶴崎 智史、栗田 剛寧、水野 稔基、 加納 希和子、辻 修嗣、奥田 真規、林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	4 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	これまでの知識、技術を統括し、理学療法士国家試験対策セミナーを実施する。セミナーを受講し、自己学習、グループワークを円滑に実施するために、学習習慣、方法を習得する。グループワークにより、理解度の向上・学習の効率化を図る。
授 業 の 目 的	1. 理学療法士国家試験に向け、対策方法を十分に理解、習得し、グループワークを積極的に行うようになること。 2. 具体的な実施計画を立案し、到達目標を明確にすること。
授 業 計 画	前期期間を通じて、以下の事項を実施する。 1. 専門基礎分野を中心に国家試験過去問題・類似問題を解き、出題傾向と対策の要点を教授する。 2. 少人数のグループワークを実施し、知識の補充を図る。 3. 個々の年間スケジュールを立案し、到達目標を設定する。 4. 学習習慣、学習方法を確立する。 5. 専任教員による定期的な面談を実施し、状況を把握し、学習指導を実施する。
教 科 書	理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント 専門基礎分野 基礎医学 2025 理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント 専門基礎分野 臨床医学 2025 理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント 基礎 PT 学 2025 理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント 障害別 PT 治療学 2025
参 考 文 献	適宜配布
成 績 評 価	小テスト（20%）、中間試験（40%）、期末試験（40%）で評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	総括セミナーⅡ
担 当 教 員	○松野 悟之、松田 淳子、幸田 利敬、森友 寿夫、中原 英子、小仲 邦、高井 範子、稲垣 忍、鶴崎 智史、栗田 剛寧、水野 稔基、加納 希和子、辻 修嗣、奥田 真規、林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単位 必修
履 修 対 象・形 態	4 年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	これまでの知識、技術を統括し、理学療法士国家試験対策セミナーを実施する。セミナーⅠを発展させ、理学療法専門分野を中心に対策セミナーを実施する。
授 業 の 目 的	1. 理学療法士国家試験に向け、対策方法を十分に理解、習得し、グループワークを積極的に行うようになること。 2. 専門基礎分野と専門分野を関連づけ、総合的に学習できること。
授 業 計 画	後期期間を通じて、以下の事項を実施する。 1. 専門分野を中心に国家試験過去問題・類似問題を解き、出題傾向と対策の要点を教授する。 2. 少人数のグループワークを実施し、知識の補充を図る。 3. 専門基礎分野と専門分野を関連づけ、実地問題に対する応用力を習得する。 4. 専任教員による定期的な面談を実施し、状況を把握し、学習指導を実施する。
教 科 書	理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント 専門基礎分野 基礎医学 2025 理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント 専門基礎分野 臨床医学 2025 理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント 基礎 PT 学 2025 理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント 障害別 PT 治療学 2025
参 考 文 献	適宜配布
成 績 評 価	中間試験（50%）、期末試験（50%）で評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、該当分野の予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法研究
担 当 教 員	○松田 淳子、幸田 利敬、松野 悟之、鶴崎 智史、栗田 剛寧、水野 稔基、加納 希和子、辻 修嗣、奥田 真規、林 真太郎、小仲 邦、稲垣 忍
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	2単位 選択
履 修 対 象・形 態	4年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	学習で抱いた疑問や気付いた矛盾を明らかにする思考過程と問題解決能力の向上を目的に一般的な研究の流れや手順を紹介し、批判的な文献の読み方、研究計画書の作成例や教員が関わる研究テーマについて紹介する。統計学の復習を含め、データの誤差管理やデータの再現性と研究の再現性の重要性について解説する。また本学の測定機器の説明や教員の研究内容、研究指導領域のプレゼンテーションを行い、研究に関する倫理観や方向性を解説し、学生の研究領域や具体的なテーマを決定させる。
授 業 の 目 的	理学療法研究では、具体的なテーマをもとに自ら研究する姿勢と能力を養うこと、また理学療法士として必要な知識を探究し、補充することを目的とする。 将来、研究活動を行うことを想定し、プレゼンテーション技術も身につける。
授 業 計 画	4月に各教員より、研究指導テーマを公表する。
	学生の希望テーマ及び教員をもとに、学生－教員のマッチングを行う。
	ゼミ活動は各担当教員と学生との打ち合わせの上、研究指導などのスケジュールを決める。
教 科 書	配布資料
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	抄録、発表内容、活動内容などにより総合的に評価する。
事 前 事 後 学 習	受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	臨床総合実習 I
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松野 悟之、鶴崎 智史、栗田 剛寧、水野 稔基、 加納 希和子、辻 修嗣、奥田 真規、林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	8 単位 必修
履 修 対 象・形 態	4 年次 前期 実習
授 業 科 目 概 要	学外の病院または施設において実施する。これまでに学習したことを臨床の場で実践し、知識・技能・態度の包括的向上を目指す。理学療法の対象となる代表的な疾患について障害評価から治療計画立案までの過程を実施できるように学習することを目的とする。また、対象者への理学療法(治療)の一部を体験する。その過程に関して根拠のある説明ができる能力を身につける。病院または施設の臨床実習指導者が本学教員と連携し臨床実習指導を行う。
授 業 の 目 的	実習指導者の指導と助言のもと、一連の理学療法プロセス(情報収集、観察、検査・測定、統合と解釈、問題点の抽出、目標設定、治療計画の立案と実施、検証)を実施できるようになること。
授 業 計 画	○学外での 7 週間の実習を通じて、以下の事項を実施する。
	・理学療法業務の見学
	・症例の評価と治療の補助
	・実習日誌の作成
	○学内での 1 週間の実習を通じて、以下の事項を実施する。
	・学外実習前：客観的臨床能力試験 (OSCE) の準備、実施、復習
	・学外実習後：客観的臨床能力試験 (OSCE) の準備、実施、復習
	実習報告資料の作成と発表
	※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと。
	※ 実習前のオリエンテーションには必ず出席すること。
教 科 書	特に定めない。
参 考 文 献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する。
成 績 評 価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する。
事 前 事 後 学 習	実習にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	臨床総合実習Ⅱ
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松野 悟之、鶴崎 智史、栗田 剛寧、水野 稔基、 加納 希和子、辻 修嗣、奥田 真規、林 真太郎
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	8単位 必修
履 修 対 象・形 態	4年次 後期 実習
授 業 科 目 概 要	学外の病院または施設において実施する。これまでに学習したことを臨床の場で実践し、知識・技能・態度の包括的向上を目指す。理学療法の対象となる代表的な疾患について障害評価から治療計画立案までの過程を実施できるように学習することを目的とする。また、対象者への理学療法(治療)の一部を体験する。その過程に関して根拠のある説明ができる能力を身につける。病院または施設の臨床実習指導者が本学教員と連携し臨床実習指導を行う。
授 業 の 目 的	実習指導者の指導と助言のもと、一連の理学療法プロセス(情報収集、観察、検査・測定、統合と解釈、問題点の抽出、目標設定、治療計画の立案と実施、検証)を実施できるようになること。
授 業 計 画	
	○学外での7週間の実習を通じて、以下の事項を実施する。
	・理学療法業務の見学
	・症例の評価と治療の補助
	・実習日誌の作成
	○学内での1週間の実習を通じて、以下の事項を実施する。
	・学外実習前：客観的臨床能力試験(OSCE)の準備、実施、復習
	・学外実習後：客観的臨床能力試験(OSCE)の準備、実施、復習
	実習報告資料の作成と発表
	※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと。
	※ 実習前のオリエンテーションには必ず出席すること。
教 科 書	特に定めない。
参 考 文 献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する。
成 績 評 価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する。
事 前 事 後 学 習	実習にあたって、予習・復習を十分行うこと。

カリキュラムマップ ～授業科目とディプロマ・ポリシーとの関連性～

科目 区分		授業科目の名称	配 当 年 次	ディプロマ・ポリシー				
				社会の 理解	コミュ ニケー ション 能力の 獲得	専門知識 の獲得	専門技術 力の獲得	探究心及 び倫理観 の育成
教 養 教 育 科 目	心と身体 の 理 解	心理学	1 前		◎	◎		
		健康スポーツ科学	1 前		◎	○		
		心の健康と運動	1 後			◎		○
	コミュ ニケー ションと情 報の理 解	教育学	2 前	◎				○
		臨床教育学	2 後	◎				○
		人間関係学	1 後	◎	◎			
		英語コミュニケーションⅠ	1 前	◎	◎			
		英語コミュニケーションⅡ	1 後	◎	◎			
		医学英語	2 後		○	◎		
		キャリアセミナー	1 通	◎	◎	○	○	◎
		統計学	1 前		○	◎		◎
		情報処理演習	1 前	◎	◎			
		脳と心	1 後		○	◎		
	科学と社会環境の 理 解	法学	1 後	◎				
		社会福祉学	1 前	◎		◎		
		栄養学	1 前			◎		
		生化学	1 前			◎		
		公衆衛生学	2 後	◎		◎		○
		生命倫理	2 後	◎				◎
専 門 基 礎 科 目	人体の構造と機能	運動器系解剖学	1 前			◎		
		内臓系解剖学	1 後			◎		
		神経系解剖学	2 前			◎		
		運動器系生理学	1 後			◎		
		内臓系生理学	2 前			◎		
		解剖学実習	1 後		○	◎	◎	○
		生理学実習	2 後		○	◎	◎	○
		運動学	1 後			◎	○	
	疾病と障害の成り立ち 及び回復過程の促進	病理学	2 後			◎		○
		臨床心理学	2 後		◎	◎		
		内科学	2 後			◎		
		整形外科	2 後			◎		
		神経内科学	3 前			◎		
		精神医学	3 前			◎		

		小児科学	3 前			◎		
		脳神経外科学	3 前			◎		
		救急医学	2 前			◎	◎	
		薬理学	3 前			◎		
		医用画像学	2 前			◎		
		臨床検査学	3 前			◎		
		スポーツ傷害学	3 前			◎		
		ペインリハビリテーション	3 後			◎		
		老年期障害学	3 前	○		◎		○
		発達障害学	3 後	○		◎		○
	リハビリテーション 保健医療とリハビ	リハビリテーション医学	2 後	○		◎		
		生活支援学	1 後	○	◎	◎	◎	
		チーム医療学	2 前	○	◎	◎		
		感染対策	1 前	○		◎	○	
		医療安全学	2 後	○	○	◎	○	
専門科目	基礎理学療法	理学療法学概論	1 前	○		◎		◎
		運動療法学	1 後			◎		
		運動療法学演習	2 前		○	◎	◎	○
		物理療法学	1 後			◎		
		物理療法学演習	2 前		○	◎	◎	○
		日常生活活動学	2 後	○		◎		
		日常生活活動学演習	3 前		○	◎	◎	○
	障害の評価	理学療法評価学	1 後		○	◎		◎
		運動器障害評価法Ⅰ	2 前		○	◎	◎	
		運動器障害評価法Ⅱ	2 前		○	◎	◎	
		神経障害評価法	2 後		○	◎	◎	
		内部障害評価法	3 前		○	◎	◎	
		臨床運動学演習	2 前		○	◎	◎	
	理学療法各論	運動器障害理学療法	3 前			◎		
		運動器障害理学療法演習	3 前		○	◎	◎	○
		脳機能障害理学療法	3 前			◎		
		脳機能障害理学療法演習	3 前		○	◎	◎	○
		神経筋障害理学療法	3 後			◎	◎	
		内部障害理学療法	3 後			◎		
		内部障害理学療法演習	3 後		○	◎	◎	○
		発達障害理学療法	3 後		○	◎	◎	○
		脊髄障害理学療法	3 後	○	○	◎	◎	○
		地域リハビリテーション	3 前	◎		◎		
		老年期障害理学療法	3 後			◎	◎	
		スポーツ傷害理学療法	3 後			◎	◎	
		理学療法特論	4 後			◎	◎	◎

		義肢補装具学	3 後			◎	◎	
		理学療法管理学	4 後	◎		○		○
		理学療法学総合演習Ⅰ	3 前		◎	◎	◎	◎
		理学療法学総合演習Ⅱ	3 後		◎	◎	◎	◎
		総括セミナーⅠ	4 前	◎	◎	◎	○	◎
		総括セミナーⅡ	4 後	◎	◎	◎	○	◎
		理学療法研究	4 前	○	○	◎	◎	◎
	臨床 実習	臨床体験実習	2 前	◎	◎	◎	◎	◎
		臨床評価実習	3 後	◎	◎	◎	◎	◎
		臨床総合実習Ⅰ	4 前	◎	◎	◎	◎	◎
		臨床総合実習Ⅱ	4 後	◎	◎	◎	◎	◎

◎ 主たる関連

○ 副たる関連